

天翔け地這う

序の巻 超人誕生

生野以久男

第一章

1

一九九三年の秋、亜木木実子は男の子を生んだ。三十八才だった。

赤い顔をした生まれたばかり赤ん坊の股間には、ペンシルキヤップの先っぽのような小さなペニスが、根元に萎んだ陰囊を付けて、ちょこんと突き出ている。

可愛らしいペニスを見出し出して、木実子はなぜかときめきを覚えた。おそろおそろ突き出た肉塊に手を伸ばす。触れた瞬間、指先から全身に電流が走った。軀中がおののき、津波のような感動が全身を襲い、胸に溢れた。

何度見ても、見飽きることはなかった。彼女はオシメを替えるたびに「早く大きくなーれ」とペンシルキヤップの先っぽを軽く引つ張った。萎んだ暗色のしわしわの陰囊までが長く伸びる。

六か月健康診査のとき、耀は停留精巣と診断された。

「停留精巣？」

胎児の時期、精巣は腹腔内の腎臓のそばで形成され、成長とともに、脚の付け根のそけい部を通り、陰囊に向かって下降する。通常は、妊娠三十週前に陰囊内におさまるが、出産時にまだ陰囊に達しないことがある。これを停留精巣というのだ。

「まあ、生後数か月も経てから下りてくることも多いので、これまで様子を見ていたのですが……、まだ陰囊に精巣が下りてこない状態であるという事です。赤ちゃんの精巣はまだお腹のなかに留まっているのでしょう」

十岐という痩せてほっそりとした若い医師は、いささか暗い感じのする面長の顔に固い表情を浮かべたまま、抑揚のない無機質の声で言った。

「精巣？」

「睾丸ともいいます」

木実子は幾分顔を赤らめ、陰茎の根元にぶら下がっている重量感のある睾丸を包んだ陰囊を思い浮かべた。あのなかの二個の卵形の塊のことか。わが子にはなぜこれがないのか。それにしても、今日までなぜそのことに全く気づかなかつたのだろうか。彼女は顔から血が引くのを感じた。

「耀の……」

木実子は小さなペニスの根元に付いている頼りなげな萎んだ陰囊を思い浮かべ、言い淀む。彼女はこころのなかで「あの陰囊は空っぽだったの？」と呟いた。

「こんなことはめずらしいことではありません。十人に一人ぐらいの割合でいます。未熟児の場合はもっと多い」

若い医師は木実子の顔色を上目づかに窺い、慰めるような口調で言った。

「もう少し様子を見ましょう。そのうち、陰囊に下りてくるかもしれない」

「え？ 下りてくるのですか？」

陰囊と精巣は精巣導帯というひものような組織でつながっていて、これが胎児の成長とともに縮み、精巣を陰囊に引っぱり込む。このような仕組みで精巣が陰囊内に移動していくが、停留精巣の場合でも、生後三、四か月で自然に下りて正常になってしまうことが多い。なかにはずっと遅れることもある。

「もつとも個人差があるので、一歳ぐらいになって下りてくる子も結構い

「のですよ」

十岐はカルテをみて、小さな患者が六か月になっていることに気付き、急いで付け加えるように言う。

「でも一歳を過ぎてても下りてこないときはどうなるのです？ この子には精巣が本当にあるのですか？」

木実子は金属性の声を一段と張り上げた。

「そのときには当然、治療が必要となります」

若い医師はうんざりしたような声を出した。

「治療？ じゃ、治るんですね、耀は正常になるんですね」

「まあ、正常というか……、手術して上がったままになっている精巣を引っ張り下ろし、陰嚢のなかに固定するのです」

「じゃ、すぐ、その手術をしてください」

「まだ、自然に下りてくる可能性が残っていますよ。なにも急いで手術することはない」

「もう直き、七か月になるわ。これまでダメだったから、十二月まで待つても同じだわ。一日も早く正常にしてやりたいのです」

「一歳まで待つて見て、それでも下りてこなければ、治療をはじめましょう」

「どうしてもっと早くできないのですか……」

「ホルモン剤を注射してみて、しばらく様子を見ましょう」

「それからでないと、手術はできないのですか」

「手術は全身麻酔でおこなうのです。体が小さいと麻酔が難しいし、手術自体もやりにくい。ですから、まあ、麻酔の専門医がいる大学病院などで、手術のリスクが一番少ない時期に手術するのがいいのです」

「それで、いつになったら手術ができるのですか……」

「三歳ぐらいですか。別に急ぐこともないので、以前は小学校に入学するころまで待つていたこともあったのですが、三歳を過ぎてても精巣が上がったままになっていると、精子のもとになる細胞が減ることが分かってきたので……」

「三歳ぐらいでは、まだ手術のリスクがあるということですか」

「まあ、別のほうのリスクとの兼ね合いを考えると……」

「手術しないですとどうなるのですか……」

「精巣が腹腔やそけい部に留まっていると精子をつくることができず、停留状態が長くつづくと、精巣自体の正常な発達が妨げられる。そのうえ、悪性腫瘍ができる確率も高まるといわれているのです」

ようやく生んだ子が三歳になれば、危険を侵しても、手術をしなければならぬとは、どういうことだ。

木実子は頭のなかが真っ白になった。どうしてよいのか分からなかった。無理して生んだ子がこともあろうに停留精巣だったとは。

「いったい、なぜなの」

木実子はこころのなかで何度も叫んだ。

耀の可愛らしいベニスを見るたびに木実子は息が止まりそうなきめきを覚えたのに、いまでは激しく落ち込み、陰鬱な気持ちに襲われた。彼女は目を背け、萎んだままの陰嚢が膨らんでくるのをじつと待った。だが一年経つても、萎んだままだった。

耀の精巣は下りてくる気配がなかった。

三歳まで待つて、十岐医師が紹介した大学病院で、耀は精巣を精嚢に移す手術を受けた。

手術は成功したものの、精巣もペニスも発育不全であった。果たして正常の機能を取り戻すか分からないという。そのうえ、前立腺ガンのおそれがあった。

手術の結果に期待を寄せていた木実子は、将来の望みまで無惨に打ち砕かれてしまった。なにもする気が起こらなかった。表情豊かだった大きな目は死んだように宙の一点を見たまま、彼女は一日中、耀のそばにじっと座っているだけだった。

耀を生んだことを後悔した。

土田に黙って墮胎を決意し、ひとりで病院に行き、手術台に横たわった。手術を終えたとき、なぜか無性に子を産みたいと思った。土田と別れたあとも、その思いを捨て去ることができなかった。

木実子は大学院の修士過程を終え、民間のシンクタンクに移って気候モデルの開発を担当していた。地球温暖化への関心が広がるにつれ、気候変動予測が注目を浴びるようになった。彼女はやがて気候変動予測プロジェクトのリーダーとなり、かつてなく研究にのめり込んでいった。だが人工流産のあと、急に、研究への興味が薄れ、ただ子を産むことを夢想することが多くなった。

「お母さん。わたし、こどもを産むわ。ここで生んでいいわね」

木実子は大きな目をくるくると動かし、幾分上向きの鼻を突き出した。

数年前、父が交通事故致死して以来、母貴世はT市の駅からバスで五分ほどところにある戸建ての家ひとりで住んでいる。三十才まで木実子も一緒だったが、仕事で遅くなることが多くなつて都心にマンションを借りた。十数年前、T市に引越してきた当時は、家の周囲にはまだ農地や雑木林が残っていたが、いまでは隙間なくびっしりと小さな家が軒を連ねてい

る。それでも背後の遠くないところに、当時の名残りを止めるかのように農地が点在し、開発から取り残された雑木林が広がっている。近くに高速自動車道のインターあり、いつの間にか、付近の雑木林のなかに廃棄物焼却施設の煙突が立ち並ぶようになった。

わがままな一人娘もようやく結婚する気になったのかと、一瞬、表情をゆるめた母も、木実子がひとりで子を産むらしいことを知ると、目を釣り上げた。

「どういう見なの、そんなふしだらは許しません」

「じゃ、他所で産むわ。いま、産んでおかなければ、一生後悔するわ」

「駄目。子供を生んじや駄目、ひとりでなんて……」

「お母さんはなんでも指図するのね。まるでわたしを自分の持ちものみたいに思っているんだから。もうたくさんよ」

娘の剣幕に恐れたのか、それともようやく戻ってきた娘がまた出て行くことを恐れたのか、あまりの突飛な申し出に呆れ顔の母はそれっきり黙ってしまった。

「お母さんにはわたしがいるからなんとも思わないかもしれないけど、わたしは一人っ子なのよ」

「お父さんが亡くなってから、もう何年もここで一人暮ししているけど、全然寂しくなんか無い。せいせいして、むしろいいくらい」

「お母さんがいなくなつたら、わたしだけになるによ。他に血の繋がったひとはだれもいないんだから」

「じゃ、早く結婚すれば」

「お母さん。またそれをいう。そんなに簡単にはできないの」

「じゃ、こどももできない……」

「結婚しなくても子どもはつくれるわ。A I Dもあるし……」

「A I D?」

「非配偶者間人工授精のこと」

人工授精とは男性の精子と女性の卵子を人為的に結合させる生殖補助医療として認められている不妊治療のひとつの方法。女性の子宮内に注入する精子の提供者のちがいで、配偶者間の人工授精（Z Z）と非配偶者間の人工授精（A I D）がある。

A I Dで用いる精子は厳選されたボランティアの提供者のもので、事前実施医療機関で凍結保存されている。もちろん、提供者の情報は誰も知ることができない扱いだ。

日本には非配偶者間の人工授精で産まれたA I D児はすでに累計二十万人以上といわれている。これらは不妊に悩む夫婦間に産まれたもので、日本の医療機関では未婚の女性を対象にA I Dをおこなっていないことになっている。

しかし最近では、男性とは関係なく子どもを産むために、ひそかにA I Dを希望する女性が増えていた。

「まあ……」

と言ったきり、声が出ないらしい。木実子が一度言い出したら聞かないことを知っている貴世は肩を落とし、しばらくして「気の強い娘ねえ」と諦め顔で呟く。

「お母さん似ね」

とどめを刺すように言う。

木実子が五か月の少し目立ちはじめたお腹を抱えて転がり込んだとき、貴世は一度白い目を向けたが、なにも言わなかった。どこか開き直っ

たような感じだった。

貴世はひたすら娘の体を気遣い、せっせと世話を焼いた。きれいなお乳が出るように、毎日新鮮な無農薬野菜ジュースを飲むといいとあって、華奢な小さな手で広くもない庭の片隅に小さな菜園をつくった。昔は農地だったのか、菜園の小松菜やほうれん草は青々とした大きな葉を広げた。

木実子は母のすすめるまま、毎日、我慢して青臭いジュースを飲み干した。

耀が産まれると、貴世は産後の娘の面倒をそつちのけにして、孫の世話にのめり込んでいった。はじめての男の子を珍しがり、一段と可愛がった。少しでもむずかり出すと、真夜中でも飛んできて、すぐ抱っこした。

「あまり甘やかしてはダメ。癖になったらどうするの」

木実子が強く言っても、聞かなかった。それに貴世には泣き声だけで、お乳が欲しいのか、おむつが濡れているのか、すぐ分かるらしく、眠っている木実子をわざわざ起こして授乳させることもあった。

眠っているときに起すと、必ずひと悶着となった。

「哺乳瓶でミルクをやつてよ。用意してあるでしょ」

「耀ちゃんには母乳が一番なの」

他のことでは木実子の言いなりの貴世であったが、お乳のことになると、頑として譲らなかつた。木実子が用意してあるといったプラスチックの哺乳瓶も、彼女に買っておいでといわれて貴世が近所の薬局からしぶしぶ購入してきたものであった。

授乳が済むと、貴世は耀を木実子から奪い取り、耀を何時間も抱きかかえ、飽きなかつた。小柄な体のどこにそんな力があるのか、その間、貴世は子守歌を歌ったり、耀の名を呼んでは話しかけた。

一日中、木実子の耳に付いて離れなかった貴世の声が突然消えた。

耀がそろそろ離乳期を迎えたころ、買い物に行くといつて出かけたきり、貴世は帰って来なかった。

貴世はまえにも突然いなくなることがあった。一人住まいをするようになってから、誰にも行き先を告げずに黙って長期間留守にすることが多かった。心配して木実子が質すと、受話器の奥から、旅行していたの、という母ののんびりした声がした。何度も拍子抜けを経験するうちに、貴世の姿が突然消えても、木実子は驚かなくなった。

今度はむしろ、腹立たしい気分が先にたつた。耀に当たることが多くなつた。まだ話すこともできないのに、そんなとき耀は木実子の顔色を窺うような目つきをすることがあった。それがまた彼女には気に入らなかった。

それでも、時間が、木実子を貴世のいない生活になれさせていく。木実子は無意識のうちに、貴世がよく歌っていた子守歌を口ずさんでいることがあった。その都度、耀は不思議そうな目で木実子の顔を見た。

「お母さん、どうしたらいいの……。どこへ行ってしまったのよ」

それでも母が耀の病気に気付かず、なにも知らずにいたらしいことは、木実子にとって唯一こころ休まることだった。母の意に反して産んだ子にこんな病気があったとは……。

耀の病気が判つてから、いつのまにか、木実子は逆に貴世が突然姿をあらわすことをおそれるようになった。

「天罰観面ということかしら」

木実子は幾分自嘲気味に呟やいた。

2

「やあ、久しぶり。昨日、キャンバスできみの後ろ姿を見かけたのでね」

土田教授だった。受話器の奥から伝わってくるくすぐるような低い声が木実子の胸に浸みていく。

かつての恋人の声が遠くから差し延べられた救いの手のように思えた。いまにもその手にしがみつきそうになるのを堪えながら、彼女は一方で、気取り屋で人一倍プライドの高い土田が三年前にも言わずに去つていった女になぜ電話する気になったのか、思い巡らしていた。

「……………」

受話器を持つ手がかすかに震えているのを感じた。木実子は自分の手をまるで他人の手のように不思議そうに見ていた。

「もしもし……。いまだどうしているの。研究所のほうは辞めたというし……。いまなにしているの」

土田はまえの勤め先に電話したのだろうか。

「……子育て中よ」

「え？ きみ、結婚したの」

「ひとりよ」

「……………」

土田はしばらく黙ったままでいた。木実子には彼がなにを考えているかピンときたが、彼女も押し黙ったまま自分の意地悪さを楽しんでいた。

「……じゃ、また」

土田がぶつきらぼうに言う。

「そお、でも、誰の子か知りたくないの」

「……きみのプライバシーを犯すことになるといけないからなあ」

「ウソでしょう。こわいんでしょ、本当のことを知るのが……」

「まさか、ぼくの……、いや、あれから四年にもなることだし……」

「いま、耀は三歳と二か月よ」

「……………」

受話器の向こうで、息を潜めている気配がした。

しばらくして「……そのうち会いに行くから」と土田はかすれた声でいうと、そそくさと電話を切った。

木実子は大学の研究室の机に座っている土田の面長の白い顔を思い浮かべた。いつもネクタイを気にしてすぐ襟元に手をやる彼がそれも忘れ、困惑して、切ったばかりの電話器を睨んでいるかと思うと、彼女は久しぶりに大きな声を出して笑いこけた。

澄まし屋の彼はいったいどんな顔をしているだろうか。昔の恋人に懐かしさを覚え、新たな期待に胸を膨らませて電話したのに、すっかり期待を裏切られ、こともあろうに子どもまでいると知らされて、彼はどう感じているだろうか。

久しぶりに母親の笑う様子を見て、耀は一瞬呆気にとられたような顔で木実子を見ていたが、やがてつられて笑い出し、彼女の周りをはしやぎながら走り回った。

木実子はふと土田が耀の父親のような錯覚に囚われた。といつても、耀には土田と似ているところはなにひとつもなかった。土田の高く尖った鼻に比べて、耀のは全体に丸みを帯びているし、黒目が点のような目も、耀独自のものではあった。細面の土田と全然似つかない対照的なまでの耀の丸い顔を見ているうちに、彼女はひとつの計画を思いついた。

その日の午後、木実子は久しぶりに十岐医師を病院に訪ねた。土岐は彼女を一目見て、一瞬警戒するような目をした。

耀の手術後、木実子は何度か十岐に手術結果の報告をしなければと思っていたが、のびのびになっていた。手術の結果が思わしくなかったことが、こころのどこかにひかかっていたからにちがいない。

木実子は十岐に会って「先生の言葉を信じて危険な手術をしたのに、正常になるどころか、かえって悪いことになってしまった」と責めたかった。といつても、そんなことは手術を試みなければ分からなかったことだと言われればそれまでだった。

それにいくら喚いたところで、耀の発育不全の精巣が正常になるわけでもなかった。発育不全でも精巣をまがりなりにも正常の位置に移動させえたことは、これだけでも手術した甲斐があったというべきかもしれない。だが木実子はなぜ耀がこうなったのか、どうしても知りたかった。

木実子は非礼を詫びながら、手術の結果を手短かに報告した。だが十岐は固い表情を崩そうとしなかった。

「耀が停留精巣になり、精巣の発育不全といった病気にどうしてなったのですか。病気の原因はなんでしょうか。これは遺伝性のものでしょうか、それともなにか別のことが原因となって……」

「は？ 原因ですか……」

十岐はいささか拍子抜けしたような声を出した。そして探るような目で木実子の目を覗き込んだ。

「停留精巣は一種の奇形でしょうか？ どんな原因でこんなことが起るのですか？」

「停留精巣は一種の発育不全にすぎません。お子さんのは遺伝性のもので

はありませんよ。単なる発育不全です。でも最近はずかこのようなケースが多いのです。まだ、原因がはっきりしていませんが……」

「最近多いということですか。それはどの程度なのです？ 急に増えているとしたら、なにか原因となりそうな怪しいものがあるのじゃありません？」

先生にはなにか怪しいと思いがたるものがありますか？」

十岐は黙ったまま、木実子から目はずし、しばらく窓の外を見ていた。

「原因ははっきりしません。でも以前よりこのようなケースが増えていることは確かですが……」

十岐は同じことを繰り返した。木実子はいらいらしてきた。

木実子は「この医者は馬鹿なのかしら、同じことを繰り返すことしかできないなんて、なにか原因になるようなものがないかと聞いているのだからなのかしら」ところのなかで思ったが、この思いをおくびにも出さず、もう一度、同じ問いを繰り返す。

「原因らしいものはいくらか考えられます。でも当てずっぽうにいうわけにはいきません。いろいろ影響しますから」

木実子は一瞬目を光らせる。

「精巣は腹腔のなかでつくられてから、精嚢へ移るのですね」

「そのとおりですが……」

十岐は怪訝そうな顔をした。

「最初から精嚢のなかにつくられないのですね」

「それは……」

十岐は木実子の意図を計りかねたように一瞬言い淀み、一息ついてつづける。

「まあ、理由はいろいろ考えられています……」

「人体は遺伝子という設計図どおりに最初からきちんと造られるのじゃなく、成長の過程で必要な手直しを加えて完成していくと考えていいのですか」

「そうですね。人体には最初からきちんと完成しているものもありますが、いくつかの器官や機能は成人になるまでの間に、未熟なものが成熟するようになり完成していくのが多いようですね」

十岐はようやく木実子に敵意がないことを感じたのか、彼女に同調するよう言う。

「未完成なものが完成するということはどういうことでしょうか。未熟なものが成熟するとは、いったいどういうことでしょうか」

「……」

「いったい、なにが未成熟なものを完成へと導くのでしょうか。未熟なものが成熟していくために、いったいどのようなものがどのような役割や働きをするのでしょうか」

「……」

十岐は木実子の話す内容に付いて行けず、ただ頭を縦に振るだけだった。

「もし、なにかあるものが人体の未成熟な部分を完成へと導き、また、なにかあるものが未熟なところを成熟させるのであれば、耀の場合、なにがそうさせたのでしょうか」

「それは成熟を促すもの……」

「それはいったい何ですか」

「まあ、それはホルモンなどじゃないですか」

十岐はようやく木実子がなにを知りたいのかわかったらしく、せき込むような勢いで言った。

「ホルモンですか。耀がああなったのはホルモンの異常のせいだと……」

「ええ、その可能性があります。どんな理由か分かりませんが、成長の過程で受けるホルモンの質と量に問題があったということですね」

「それはどういう意味ですか。わたしの体に異常があったということですか」

十岐は一瞬激しく目を動かした。

「……いや、その……、それはわかりません。外から暴露したり、食物などから摂取されることもありますから」

「ホルモンがですか。ホルモンというのは……」

「女性ホルモンとか男性ホルモンとかいいますが、それはエストロゲンとか、テストステロンとかいう化学物質ですよ」

「そういう物質が耀の精巣の位置を決定したというのですか」

「ホルモンが与えられる時期と量が問題なのです。アメリカの生物学者がネズミをもちいた動物実験で、胎生期におけるホルモン量の変化が成長のあとまで影響をおよぼすことを見つけたのです」

「でも、それはネズミのことでしょう」

木実子は息子の耀がネズミと一緒にされたような気がした。

「ネズミも人間と同じ哺乳類だし……、まあ、ヒトの場合も、胎児の成長はホルモン・レベルの変動に大きく影響されていると考えられているのです」

十岐は木実子との話を早く終えたがっているように見えた。しかし彼女にはそんな気は全くなかった。かといって、外来患者の診察中の十岐をいつまでも一人占めしていることはできなかった。

「耀のケースは遺伝ではなくて、ホルモンが問題だとおっしゃるのですね」

「そういうことです」

十岐は短く応えようと、木実子には目もくれずに、体の向きを直して、机のうえの新しい患者のカルテに目を移した。

木実子はしばらく十岐の横顔を見ていたが、諦めて椅子から立ち上がった。

3

受話器を置いたときから、土田の頭の中で木実子の声が耳の奥に突き刺さったように鳴り響いた。彼は椅子から立ち上がると、本棚と作業机の間を何度も行き来した。

その間、無意識にネクタイに手をやっては、その都度、急いで手を引く。彼は自分でなにをしているのか、分からなかった。

四年前、木実子が突然彼の前から姿を消した。なにも言わずに、自分を捨てるように、彼女は去っていった。土田は決して彼女を追おうとしなかった。プライドが傷つけられたという思いが強かった。その思いが今日まで彼女になんの連絡もせずにしたのだ。

なのにどうして自分を捨てた女に急に電話したのだろうか、自分でもよく分からなかった。こころのどこかに教授に昇格したことを昔の女にひけらかしたい気持ちがあったのかもしれない。

「誰の子か知りたくないの」

木実子の声が執拗に土田の耳の奥に絡み付いて、彼を追い詰める。

「ぼくの子であるはずがない」

彼は何度も否定するが、その都度、新たな疑惑が湧き出て、彼を不安に陥れるのだった。ふたりの行為があつた以上、可能性を否定できない。

彼は分かり切つたことを何度も吟味し、なんとかしてその可能性を否定しようと試みる。ここらどこかに否定を拒否したい気持ちがあるのか、何度否定しても執拗に新たな疑惑が頭をもたげるのだ。

土田は電話したことを悔いた。あの電話さえしなければ、こんなに悩まなくともすんだと思うと、受話器を叩き付け、木端微塵に砕いてしまいたい気がする。

「本当に、ぼくの子だろうか」

新たな疑念が湧いた。

木実子が子を出産したというのは本当だろうか。本当に出産しているのなら、電話するまでなぜ黙っていたのだろうか。突然姿を消しながら、今までなんとも言つて来なかつたことに対する仕返しに、あんなデタラメなことを急に思い付いたのではないか。

そういえば、あのとき木実子は一人で、子供を連れていなかったではないか。とにかく、本当に子供を生んだのか、いま、本当に子供を育てているのか、一度確かめなくてはと思つた。いろいろ考えるのはそれからではない。

もしかしたら、よりを戻したいと思つていて、ひと芝居を打つたのかもしれない。

とにかく、自分の目で確かめることだ。善後策はそれから考えればいいことだ。土田は一度、木実子を訪ねてみようと思つた。

と思つたものの、いざ出かけるとなると、気が重い。三年も会っていない木実子と顔を合わせたとき、どんな顔をすればいいのか。自分を捨てる

ように去つていったことを考えると、たとえどんな用事があるとしても、意地でも自分から彼女に会いに行きたくはなかつた。

彼はプライドが傷つき、ひりひりと痛むように感じた。

軽いノックにつづいて、ドアから左藤木未佐の少年のような小さな顔がのぞいた。資料整理のアルバイトとして雇つたが、いつのまにか秘書の仕事も彼女の仕事になつていた。

「今日は三時からK省の委員会がありますが、出席なされますか」

「ああ、そうだったか……」

土田は一瞬木実子の顔を思い浮かべた。

「これから出ることにしよう。帰るときまでに、亜木さんというひとから電話があつたら、連絡してくれないか」

「あきさんですね。はい、分かりました」

復唱する未佐の声を聞き、彼は一瞬戸惑いを覚えた。なぜ、急に木実子のことを言い出したのか自分でも不思議な気がした。

4

耀の停留精巢にホルモンが関係しているとは、木実子にとって意外だった。彼女は頭が混乱した。遺伝子の異常によるのであれば分かり易いのに、ホルモン・レベルの異常のせいとは。それにしても、どうしてホルモン・レベルに異常が生じたのだろうか。

木実子は気をしずめ、十岐との会話を何度も反芻した。いままで漠然と遺伝子の欠陥かと思つていたことが、全然別の仕組みで

つくられていたのだ。遺伝子という基本設計のもとで、ホルモン・レベルによつてさらにさまざまなアレレンジが可能となる。出生前に、細胞、器官、脳、行動といったものがホルモン・レベルによつてさまざまにアレレンジされるというのだ。

だから同じ遺伝子をもつ個体でも、ホルモン・レベルの変化によつてさまざまにアレンジされ、多様なものとなりうる。この場合、遺伝子には入れ替えや変異といったことはなんら生じない。いいかえると、これら多様な表現は遺伝子レベルと無関係におこなわれるということだ。

「ホルモン・レベルの違い……」

木実子は呪詛のように何度も呟く。

「ホルモンが胎児の性分化を決めるということは本当ですか。耀が停留精巢となった原因はホルモン・レベルの異常だったのですか」

頭髮をきれいに分けた中年の医師は穏やかな目を眼鏡のレンズの奥でクルクル動かし、畳み掛けるように問い質す木実子をしばらく珍しそうに見ていた。

木実子は十岐の病院を出ると、耀が手術を受けた大学病院を訪れたのだった。

彼女はどうしても十岐が言っていたことを、もう一度、耀の担当医に確かめておきたかったのだ。

「ヒトの場合、性別は遺伝子情報だけですなりと決まらなところがあるんですね。受精卵は胎児として発育していく過程で、はじめてオスカメスかに分化していくのですが、このときホルモンが決定的な役割を果たすといつていいでしょう」

担当医は探るような目をして、話していることを木実子が理解しているかどうか確かめながら言葉を選んで話をつづける。

「受精後、六週間の時点では、胎児は男性（オス）にも女性（メス）にも分化する可能性があります。この時期の胎児には精巣にも卵巣にもなりうる生殖腺が生じているからです」

成長すると雌雄別々の器官となるものであつても、多くは胎児に共通して見られる組織から発達するという。ペニスになる組織もクリトリスになる組織も全く同じ組織から発達するもので、胎児の発育にどのようなホルモンが関与したかによつて決まるのだ。

なかにははじめからオス用とメス用の別々の器官となる組織が用意されている場合もあるが、このようなケースでも、性分化の過程で不用になつたものは成長とともに消滅する仕組みとなつている。たとえば、ヴォルフ管とミューラー管で、前者が男性生殖器の原形となるものであり、後者は女性生殖器の輸卵管や子宮の原形となるものである。

このように、ヒトの場合、性分化まえの胎児の初期の段階では、オスにでもメスにでもなる可能性をもっている。そして受精後七週間目あたりに、しかるべきホルモン・レベルの刺激を受け、男性への性分化が本格化するという。

胎児はこのような時期にしかるべきホルモン・レベルの刺激を精巣から受けられないと、男性特有の器官と脳・神経系を正常に発達させることができなくなる。これらは精巣と連動して一体化しているものであるからだ。

ペニスが発育していないと、精巣でつくられた精子がうまく放出されないといつたことが生じる。また、女性生殖器官の原形となるミューラー管が完全に消滅せずに残るおそれが出てくるのだ。

この刺激を与える物質が男性ホルモンのテストステロンだ。これが女性生殖器の原形となるミューラー管に消滅の情報を送り、男性生殖器の原形であるヴォルフ管に発達を促す情報を出す。これによって、前立腺や外生殖器が発達し、ペニスなどが形成されていくことになる。

「そうすると、耀はしかるべきホルモン・レベルの刺激を受けられなかったということですか」

担当医はカルテから目を上げると、木実子の目をじっと見た。

「停留精巣でしたね。なんらかの理由で、精巣そのものの発育が十分だった可能性があります」

「しかるべきホルモン・レベルでなかったのが精巣の発育不全の原因だったのですか。どうしてそうなるのですか」

担当医の目に俊巡の色が浮いているように見えたが、木実子は構わずつぶけた。研究会や学会での議論の場面を思い浮かべた。彼女は微塵の曖昧さをも見逃すまいと、相手の目をじっと見た。

「妊婦が外部からホルモンか、あるいはホルモン類似物質を摂取したりして、母体にそれらの物質が蓄積している場合、それらが胎児へ移行してなんらかの悪さをするのが考えられますね」

「それは……」

「これらの物質は脂肪にとっても溶けやすい。そのため、ホルモン剤入りの化粧品や薬剤を使用したり、ホルモン類似物質に汚染された魚介類や野菜などの食物を摂取したりすると、これらの物質が体外にすぐ排出されずに体内の脂肪組織に蓄積されるのですね」

「すると、妊娠とは関係なく、以前からそれらの物質が体内に蓄積していて、妊娠した場合、これらの物質が胎児へ移っていくということ……」

「そういうこともありますし……、また……」

「妊娠中にそれらの物質を使用したり、食物から摂取すると、その物質は直接胎児に吸収されることにもなるということですか」

「そういうことになりますね」

木実子は信じられなかった。たとえそのような物質を食物から摂取することがあってもごく微量に過ぎないのではないか。それが耀の精巣の発達を妨げ、ペニスの発育を抑えるなんてとても信じることができなかった。ほかの要因があるのではないか。

「でも胎児へそのような影響を及ぼすには、かなりのレベルの量を取り込む必要があるのでしょうか」

「いいえ、ほんの極々微量で作用するのです。いままで無害のレベルだと思われ、無視していた超極微量で十分だったのです」

「超極微量？」

「ppp (一兆分の一) とか、ppb (十億分の一) とかいう数字ですよ」

「……でもホルモン類似物質なんて、ごく限られたものなんでしょう」

「いや、わたしたちの周りにあるさまざま化学合成物質がこれに該当するらしい……。なにしろこれまで開発された化学合成物質の数は一千万から一千五百万もあるし、現在世界で使用されている化学合成物質は十萬種類とも二十萬種類ともいわれていますから」

「え？ そんなに……。それでそのうちどんな物質が該当するのですか、それらに……」

「合成ホルモン剤としては女性ホルモンのエストロゲンや男性ホルモンのテストステロンなどがありますね」

「ホルモン類似物質といわれましたね。これに該当する化学合成物質は……」

…」

「最近日本では、ホルモン類似物質を環境ホルモンと呼んでいるひとも増えてきているようですが、正確には、内分泌攪乱化学物質といわれているものです。これに該当する……」

「その内分泌……」

「内分泌攪乱化学物質」

「それはそんなにないんでしょう？ ヒトの内分泌を攪乱するといっても、そう簡単にできるものではないんじゃないですか？」

「いや、それがそうでもないらしい。ホルモンを受けるレセプターがかなり大雑把らしいというんですから、もし、この説が正しければ、これに該当する化学合成物質はいくつあるか分かりませんね」

「現在分かっているものにはどんなものがあるのですか。たとえば……」

「DDT、PCB、ダイオキシン、それに……」

「ダイオキシン？」

「ビスフェノールAやノニルフェノール、フタル酸エステル類、スチレン類、トリブチルスズ……」

ビスフェノールAはポリカーボネート樹脂、エポキシ樹脂、フェノール樹脂など工業製品や家庭用製品に使用されているプラスチックなどの原料である。ノニルフェノールは合成洗剤などに界面活性剤として用いられるほか、プラスチックの酸化防止剤や安定剤として広く使用されている。フタル酸エステル類はプラスチックや塩化ビニールの柔軟剤であり、スチレン類は発泡スチロールやプラスチックの原料である。トリブチルスズは船底や漁網などの貝類附着防止用塗料だ。

「まだあるのですか」

「実際にチェックしてみないとなんともいえませんが、疑いのあるものをあげれば、何十、いやその何倍か、何十倍か……。まあ、かなりの数になるでしょう。なにしろ、これまで合成された化学合成物質は一千万以上あるのですから」

「ダイオキシン」

これを聞いたとき、木実子は不意に目の前にドスを突きつけられたような衝撃を受けた。

突然、頭のなかでダイオキシンという活字が大きく渦を巻いた。たしか、耀を連れて病院通いをしているとき、近くにある産業廃棄物の焼却炉周辺の土壌調査が行われ、ダイオキシンによる高濃度汚染が明らかにされたことがあった。それ以来、新聞でたびたびダイオキシンのことが取り上げられるようになった。

木実子は最近になって、ようやく住んでいる地域が日本でも有数のダイオキシン汚染地帯であることを知った。それでもどこか遠いところの出来事ぐらいにしか感じられなかった。

耀はダイオキシンのせいだ、発達に必要な男性ホルモンのテストステロンがしかるべきレベルとならなかったというのか。未発達の精巣（形がさだまらない有るか無しかの柔らかい睾丸）、発育しない異常に小さなペニス、そして前立腺ガンの危険が……。

「ああ……」

木実子は大きな溜息をついた。

「土田先生はいらしゃいませんか。どうしてもお目にかかりたいのですが……」

大学病院からの帰途、木実子は土田がダイオキシンのついて調査していることを思い出すと、急に彼の研究室を訪ねる気になった。というより、いつの間にか、ひとりで彼の研究室へ足が向いた感じだった。彼女には思い付くとすぐ、前後の見境もなく行動に移すところがあった。

ノックの返事を待たずに研究室のドアを押すと、ドア近くのスチール机から若い女性が顔を上げた。髪を短く切っているせいか、少年のようなあどけない感じの顔が一層小さく見える。

白目の多い鋭く光る目でしばらく値踏みするように木実子を見ていたが、「亜木さん……ですか」と突然言った。

「ええ、でもどうして……」

木実子は口籠った。

「先生はいま、外の委員会に出ていますが、連絡してみますから、お待ちください」

木実子は不意に自分の名を呼ばれ、戸惑った。反射的に身を引くと、ドアから離れ、廊下に佇む。

かすかにもれてくる電話をする声を耳にしながら、秘書のらしい女性がなぜ自分の名を知っているかと、彼女はしきりと訝った。

土田が木実子が来るのを予期していたのだろうか。それともこの見知らぬ女性は土田とのかつての関係を知っているのだろうか。彼女は顔が赤らむのを感じて、一瞬、身を翻し、逃げ出そうかと思った。

「会議はすぐ終わるからお待ちいただきたいのですが、如何いたしますか」

木実子は女性のあとに従い、研究室のなかに入った。

入口のドアにつづいて小さな次ぎの間風の空間があり、その奥に大きな空間がつづいている。仕切りのドアが解放されたままで、長方形の幅狭い空間は細長く伸び、両側の壁には天井まで高い本棚が据え付けられ、古びた資料のファイルがびっしり並んでいる。そのせいか、室全体が薄暗く、なんとなく陰気くさい。ひとつだけある奥の部屋の透きガラスの窓に向かって両袖の机が置いてあつて、そこから二、三メートル離れて仕切りのドア際の反対の壁——ここにも天井に届く高い本棚がある——に寄せて作業用の大きなテーブルが据え付けてある。

木実子はすすめられるままに、テーブルの端の椅子に腰を下ろした。目のまえの本棚に資料のファイルボックスが並んでいる。彼女は立ち上がるのと、ダイオキシンの表示のある新聞記事を詰め込んであるファイルボックスを抜き出した。

「それはまだ整理していませんが……」

開放されたままのドアの向こうから若い女性の声があった。

「向こうの本棚に整理したスクラップブックがあります」

開放されたドアの向こうからどこことなく少年のような雰囲気を漂わせた笑顔が覗いた。

「新聞記事を集めているのですか」

「ここにこの三年分が揃っています」といいながら、踵がないような底の低い靴をはき、細い身体をバレリーナのように軽やかにしならせて近寄り、本棚から抜いた三冊のスクラップブックを木実子のまえに置いた。

「あなたは……」

「三年前からアルバイトしています。左藤木未佐といいます。まだ大学院に籍があるのですが……」

木実子は未佐の笑顔に少年のようなはにかみが浮かんでいるのを見た。

「もしかしたら、あなたもダイオキシンを研究テーマにしているのかしら」

「いいえ、ダイオキシンの大いに関心がありますが、いまはビスフェノールAを中心に調べています」

「じゃ、環境ホルモンのひとつ……」

「え？ ご存じでしたか。プラスチックの原料の一つですが……」

「名前だけ。さつき、耳にしたばかりなの。では……、あなたも環境ホルモンについての専門家のね」

木実子は納得したように何度も頷きながら、未佐の顔をじっと見た。

未佐は「いえ、それほどでもないんですよ」と恥ずかしそうに言い、くると細い身体を翻した。

木実子は未佐が置いていったスクラップブックを手を取った。彼女はページに目を落としていたものの、まだ若い未佐がなぜ環境ホルモンに関心があるのか気になつてしかたがなかった。

というより、未佐に自分がなぜダイオキシンのついて知りたがつているか、その理由を知られたくないという思いが強かった。だが一方で、気取り屋でどこか信用のおけないところがある土田よりも、同性の未佐のほうがダイオキシンの環境ホルモンの身体への影響についてよく理解しているような気がした。

木実子はスクラップブックのページを機械的にめくった。最初のページにある「ダイオキシン問題の背景と日本における対応」についての年表が

目に入った。

一九六二〜七一年

◇ベトナム戦争で米軍が枯れ葉剤を大量散布、その影響で先天性異常児の出産や流産、ガン多発

一九六八年

◇九州北部を中心に、PCBによる中毒（カネミ油症事件）が発生

一九七六年

◇イタリア北部、セブソで化学工場が大爆発、大量のダイオキシンが飛散、周辺に皮膚病や肝機能低下などが発生、また、ダイオキシンの高濃度に汚染された両親から女の子のみが生まれる

一九八三年十一月

◇愛媛大学立川涼教授の研究グループがゴミ焼却炉の飛灰や残渣からダイオキシン類を 検出

同年十二月

◇厚生省が専門家会議で検討

一九八四年五月

◇厚生省が一日摂取評価指針を体重一キログラム当り百ピコグラム（pg）とする（一ピコグラムは一兆分のグラム）

一九八四〜八五年

◇厚生省がゴミ焼却炉の緊急調査を実施

一九九〇年

◇世界保健機関（WHO）が耐容一日摂取量（TDI 一生摂取しつづけても健康に害がな いとされる一日当りの値）を体重一キログラム当り十ピコグラムとする

同年十二月

◇厚生省ダイオキシン類発生防止等ガイドライン検討会答申

一九九四年

◇京都でダイオキシン国際会議。日本の対策の遅れが指摘された

一九九六年六月

◇厚生省は科学研究班による中間報告をまとめ、TDIを体重一キログラム当り十ピコグラムとし、ガイドライン見直しのための諮問委員会を設ける

同年十二月

◇環境庁は健康リスク評価指針値として体重一キログラム当り一日五ピコグラムとする

木実子は自分が子どもを産もうと決心するかなりまえから、ダイオキシンのことが問題になっていた。そのことをなにも知らずに、彼女は耀を生んだのだ。彼女は自分の馬鹿さ加減をあざ笑った。貴世はダイオキシンの顔が浮かんだ。木実子は突然、顔が凍り付くを感じた。貴世はダイオキシン汚染のことを知っていたのではないか。だからきれいな母乳を意識して、せっせと野菜ジュースを飲ませようとしたのではないのか。

「左藤木さんでしたね。すみませんが、T市近郊でダイオキシンが問題となったのはいつころからかしら」

木実子はテーブルから、机の未佐に声をかけた。

「ああ、T市ですね。資料があるはずですから、調べればすぐ分かります」

未佐が腰を上げたとき、電話が鳴った。受話器に手をのばす。

「はい、分かりました。そうお伝えします」

未佐はメモ用紙を持って木実子に近づいてきた。

「実は、会議が長引いているそうです。お待ちいただいてもいつ終わるか分からないので、こちらから今夜にでもお宅のほうにお伺いすると申しています……」

一瞬、木実子は土田が嘘をついていると思った。会議はとつくに終わっているにちがいない。秘書がいる研究室で木実子と会うのを避けたかったのだ。

研究室で自分の子どもを産んだという女と言いかねない。退屈な会議中の笑いや者になりかねない。臆病なほど慎重な男のことだ。いろいろな思いを巡らしているうちに、彼はそのことに気づいたにちがいない。

とにかく、子どもを産んだ元恋人と研究室で会いたくないと思ったのだ。

「そう、いいわ」

「それで、いまお住まいの住所と付近の地図をお聞きしておくようにと申しておりますのですが……」

木実子はふと土田が耀に会いたがっているのかなと思った。つぎの瞬間、彼は子どもを産んだといっていることを疑っているのではないかと感じた。

木実子は自分の思いとは逆に、未佐が差し出したメモ用紙に住所と簡単な地図をすらすらと書いて返した。

「あ、T市に住んでいらしゃるのですか。さっきの件、お急ぎでしたらいますぐ調べますが……」

「いいわ」

短くいうと、木実子は立ちあがった。

保育園に陽一郎を迎えに行く時間が過ぎようとしていた。また若い保母

さんにいやな顔をされそうだった。

6

木実子は遠くでチャイムの音が鳴ったような気がした。

昨夜、土田が訪ねてくるかもしれないと思い、遅くまで起きていた。そのせいも、ひとりだけの簡単な昼食を終えると、テレビを見ているうちになつて眠り込んでしまった。いつの間にか食卓用のテーブルにうつ伏せになつて眠り込んでいたらしい。

木実子は顔を上げ、壁に掛けてある丸い時計を見た。二時を回ったばかりだった。まだ耀を迎えに行くには早すぎる。

そのとき、もう一度チャイムが鳴った。

「ハイ」

彼女は返事したものの、すぐに立ち上がるという気が起こらなかった。多分セールスかなにかの勧誘だろう。大きく伸びをした。それからゆっくり立ち上がると、彼女は玄関に向かった。

玄関の扉横の窓にふたりの人影が写っている。

「どなたかしら……」

木実子はドアのなかから声をかけた。サンダルを突っかけ、ドアに近づき、ノブを回した。

隙間から少年の顔が覗いた。左藤木未佐だった。隣にがちりした体つきをした浅黒い顔の若い男をひとり伴っている。

「こんにちわ。昨日の宿題のことですが……。あ、こちらはT新聞の森野

さん。この辺のダイオキシン問題をずーと追いかけているかたです」

木実子は一瞬、昨夜とうとう姿を見せなかった土田が様子を探らせるために未佐を寄越したにちがいないと思った。しかしダイオキシン問題を追いかけているという、一見鈍重な感じのもうひとりの男が気になった。浅黒い顔のなかで光る目には鈍重に見えても食いついたら離さない迫力があつた。

木実子は急いでテーブルの上を片付け、二人をリビングルームに招き入れた。

「どうしてT市を調べるようになったのですか」

木実子はダイオキシン一般のことよりも、T市という地域で問題となっているダイオキシンについて知りたいのだ。

「大都市東京から排出される大量の産業廃棄物を燃やしてダイオキシンなどの有害物質を大量に吐き出しているT市こそ、まさに現代文明の縮図のようなものですからね」

「現代文明の縮図？　じゃ、こんなところはほかにないのですか」

「いや、T市よりひどいところは何か所もありますよ。でもここは大都市東京と隣り合わせで、まさに大量生産大量消費大量廃棄の現代文明を地で行っているようなところですからね」

森野にはT市が単なる一地方都市ではなく、現代文明を象徴するひとつの升目のように感じているらしかった。

「この辺では、一九九二年ごろから産業廃棄物の焼却がはじまったそうですよ」

未佐は確かめるような目をして森野を振り返る。

「近隣の住民の話では、そのころ、ふたつの業者が住宅から一〇〇メートル

ルほど離れた松林に大きな穴を掘って、解体家屋の廃材を燃やし始めたそうです」

森野は真つ白い歯を見せ、歯切れよく言う。

「九三年ごろはどうだったかしら」

木実子は迂闊にもダイオキシン問題を見過ごし、大きなお腹を抱えて母のところへ転がり込んだ当時の様子を知らなかった。

「異臭のする煙やばいじんが飛び交い、夜空に舞い上がる火の粉など、見た目には以前もいまとそう変わっていないと思いますよ。でも野焼きの量も年々増え、ますます酷くなっています。当時も住民たちが市や県の担当者へ何度訴えても、まじめに対応してくれなかったといえます」

もし当時すでに悪臭がし、夜空に火の粉が飛んでいたとすると、どうして気が付かなかったのだろうか。木実子はそのころ自分がどのようにして過ごしていたのか必死に思い返そうとした。母の手前、腹の大きい木実子は人目を避けていた。

「……その当時から、近くの住民の反対運動が大々的に行われていたのですね」

「大々的かともかく、わたしも彼等に同行したことがあります。それにもかかわらず、産業廃棄物の焼却炉が増えていき、このころでは十数か所もの大型の焼却施設が集中する産業廃棄物の焼却密集地帯と化してきています」

「……………」

「九五年と九六年に行われた土壌汚染調査によって、この地域の焼却炉集中地帯とその周辺がダイオキシン類で高濃度に汚染されていることが明らかになったのです」

「土壌がダイオキシン類の高濃度汚染？」

「そうです。ダイオキシンは何種類もあるので、それらを引括めてダイオキシン類をいっていますが、この地域の汚染はとくに高かった。数字は資料に載っています」

森野の話に合わせて、未佐は手際よく資料や切り抜きをテーブルに広げる。

だが一通り話し終わると、森野は「あとは左藤木くんに聞いて下さい」といつて立ち上がった。取材の約束があるという。

未佐はこのまま資料の説明をつづけるつもりか、森野に「ありがと、じゃ、またね」と椅子に座ったまま手を振った。

木実子は森野を送出してから、洗面所に寄って鏡を見た。

チャームに促されて玄関に立ったとき、両手で髪を直したつもりだったが、よく見ると、うつつ伏せになって居眠りしていた痕跡が頬に付いていた。髪形も微妙に歪み、化粧が剥げ落ちている。彼女は櫛を入れ、すばやく化粧を直した。

リビングルームに戻ると、未佐の姿がなかった。

木実子はテーブルに広げたままになっている資料に目を落とした。未佐が座っていた椅子のそばに最新のグラビア週刊誌(AERA '97.1.20)が置いてある。

木実子は手を伸ばしてたぐり寄せると、端が折り込んであるページを開いた。

「ダイオキシンが子宮を滅ぼす」

大きな活字の見出しが目飛び込んできた。

記事のリードには「近年、二十代、三十代の女性の間で子宮内膜症が急

増しているといわれている。その一因は、ダイオキシンかもしれない。米国での実験は、その可能性があることを示した。子宮の危機は、人類存続の危機。我々は環境汚染によって自らの首を絞めている」とある。

子宮内膜症とは、子宮内膜やそれに似た細胞組織が子宮以外のところで増殖する病気である。メンスのたびにそこから出血して激しい痛みを起したり、不妊症の原因ともなる。米国では出産可能な年代の女性の十人に一人がこの病気に苦しみ、日本でも百万人以上の女性が悩まされているという。

木実子はふと背後に人の気配を感じた。振り向くと、未佐が肩越しに開いているページを覗き込んでいた。

「これ、本当かしら、メンスの回数が多いほど懼かりやすいというのは」

木実子は後ろに立って記事を覗いている未佐を意識して言う。

「『初潮が早まり、出産年齢が遅くなったことがおもな原因……』ですって……、じゃ、わたしは……」

木実子ほもどかしげにページを追った。

「わたし、メンスがないんです」

未佐はぼつんと言った。木実子は顔を回して、未佐の顔を見上げた。彼女は上半身を幾分前に傾け、目をページに釘付けにしている。

木実子は椅子から立って、未佐を抱えるようにしてそばの椅子に掛けさせた。彼女はあらためて未佐を真正面から見た。未佐は少年のような顔に似合わず、ふくよかな胸をしている。木実子は手を伸ばして未佐の胸を触った。

未佐は「あつ」と短い声を発して、体を振った。すでに成熟した女のものであった。

「ウソでしょ」

木実子は笑い飛ばそうとした。そのとき、伏し目がちの眼に恨めしそうな光を貯え、涙を浮かべている未佐に気づいた。

「初潮が早まっているといっても、遅いひともいるわ。なにも……」

木実子は「まだメンスがないからといって、なにも悲観することはないんじゃない」と言おうとして、口を噤んだ。未佐が恐い顔をして、睨んでいた。

「わたしは女性ではないのです。だから、わたしにはメンスがないのです」
「……………」

木実子は口を開けたまま、理解できないことをいう、未佐の顔と胸をまじまじと見た。彼女はもう一度未佐の乳房の感触を思い出した。あれは偽ものだったというのか。それとも……。

未佐は木実子の目の色から戸惑いを感じ取ったらしく、しばらく躊躇っていたが、やがて立ち上がるとブラウスのボタンを外しはじめた。ブラジャーの下から豊かな胸が現れた。

「きれいな胸ね。あなたは真正銘の女よ」

未佐は幾分頭を傾げ、そのままの格好で立ち尽くしている。木実子には彼女が迷っているように見えた。

「風邪を引くわよ。さあ、ブラウスを着て」

木実子はなんとなく恐かった。未佐の秘密を知りたいとも思わなかった。これ以上未佐に関わりたくなかった。乳房を露にした半裸身の肩にブラウスを掛けて、いつのまにかスタートしたゲームを早く終わりにしたかった。

だがこころのどこかで、未佐の秘密をとことん知りたいような気持ちがあった。こんな豊かな胸の下になが隠されているのだろうか。白い肌を

切り裂き、中を覗いて見たい気がした。

未佐は身体を横に屈め、素早くスカートを脱ぎ、下着を取った。

細く長い首から狭い肩幅、突き出すように隆起した胸、くびれたウエスト、豊かな腰、それはなめらかな線に包まれた完全に発育した女性のものだった。

未佐はゆっくり正面を向いた。

そこには完璧な女性の立像があった。

「あっ」

木実子は見ても見えないものを見たような気がして、急いで顔を背けた。

「よく見て」

未佐の冷い声でした。

拒否できない響きがあった。木実子はおそろおそろ顔の向きを変えた。

耀が立っていた。

耀かと思ったが、耀ではなかった。

木実子は息を呑んだ。血の気がさつと引いた。

そのまま気を失いそうだった。彼女は椅子のアームに掴まって、頭のなかを嵐が過ぎ去るのを待った。

異常に小さなペニスをもった豊かな乳房の未佐が立っている。

木実子は自分に言い聞かせるかのようにな、こころのなかで「耀が……」と反芻しながら、床から未佐のブラウスを拾った。彼女は未佐の身体をブラウスで包み、しっかりと抱いた。

「わたしにはペニスもあるの。わたしは女でも男でもないの。私の肉体は半陰陽。だからメンスがないんです」

耳もとで、未佐のか細い声でした。

半陰陽では外生殖器の外見から男性と女性の区別ができず、遺伝子、染色体、性腺（卵巣と精巣）、内生殖器、外生殖器などの一部または全部がまちまちである。両性の性腺を有しているケースを真性半陰陽、遺伝子と外見とで性別が異なるケースを仮性半陰陽と言ひ、後者は性腺の性別で男性仮性半陰陽、女性仮性半陰陽と区別する。女性仮性半陰陽では陰核が肥大し、ペニスと間違われることがある。

一方、男性と女性の区別を前提とした見方から離れて、半陰陽をインターセックスと呼び、第三の性と位置づけるひとたちもいる。

木実子は燃えるように熱くなった未佐の身体を抱きかかえ、いつまでも背中を撫でていた。

第二章

7

未佐はあの日からそのまま木実子の家に居座り、そこから土田教授の研究室に通うようになった。

彼女はあの日、なぜ、木実子に自分の秘密を打ち明ける気になったのか、いまもつてよく分からなかった。突然木実子に胸を触れられた瞬間、なにか得体の知れない力が、有無を言わず、彼女を押し流していった。彼女は前後のことや流れに抗することも忘れて、ただ流れのままに流されていったのだ。

優しく触れた木実子の手の温もりが、長い間、必死に守ってきた秘密の扉を開かせてしまったのかもしれない。

未佐は木実子の柔らかい手の感触のなかで、張り詰めていたものがすべて氷解していくのを感じた。この人なら自分のこれまでの悩みを理解してくれる。木実子の抱擁に身を任せながら、未佐はそう思った。

「お姉ちゃん、これ読んで頂戴」

最初、耀は沈みがちの母親との静かな生活のなかに飛び込んできた若い未佐に戸惑ったようだった。だが直に慣れて、未佐が家にいるときは彼女に纏いついて離れようとしなかった。

まだ四歳にもならないのに、五歳児ほどに身体が大きい。腕の力が強く、敏捷に身をこなす。そのうえ、顔つきもしつかりしていて、ときおり大人びいた仕種をする。それに幼児とは思えない理解力を持っていた。木実子

との話を聞いていて、大人がするような質問にときどき未佐のほうが翻弄されることがあった。

耀は持っていたグラビア週刊誌 (AERA '97 1.20) を突き出す。未佐はじめて木実子の家を訪ねたとき持ってきた週刊誌だった。

「耀ちゃん、どこにあったの」

未佐はもう一度見たいと思っていたが、どこへいったのか、あの日から見当たらなかったものだった。

「ママのベット」

耀は未佐の椅子に登り、膝に乗る。

「どこ読もうか」

未佐はできればダイオキシンの記事を見たくなかった。だが耀は一気に「ダイオキシンが子宮を滅ぼす」のページを開いた。小さな手でもう一枚ページをめくる。

ページの中ほどに、赤ちゃんがおっぱいを吸っている大きな写真があった。

「ここ読んで」

耀は写真の説明文を指差した。

そこには小さな活字のつぎのような説明文があった。

「『母乳は、ダイオキシン類の排出器官みたいになってるんです』と専門家。母親の体にたまったダイオキシン類は、母乳を通じて子どもたちの体を汚染する」

「それダメ」

いつの間に来たのか、木実子が背後に立っていた。肩を軽く突っ突き、振り向いた未佐に、彼女は目配せして小さく頭を横に振った。

「ママ、ぼくもママのおっぱい飲んだ？」

「ええ、そうよ」

木実子は気が気でなかった。心臓が止まりそうだった。耀から週刊誌を奪い取りたかった。

「いっぱい飲んだ」

「いっぱい、いっぱい飲んだわよ」

「ふーん」

耀は写真から目を離そうとしない。

「耀ちゃん、こつちの本を読んであげようか」

未佐は手を伸ばして、テーブルの端からいつも読んでいるお気に入りの童話の本を引き寄せる。しかし耀は写真を見たまま、週刊誌を離そうとしない。未佐の声すら聞こえないらしい。

「さあ、耀ちゃん、ママとお風呂に入ろうか」

耀は振り返って、木実子をじつと見た。

「お姉ちゃんと入る」

未佐の体がびくつと動いた。

「お姉ちゃんは駄目。ママと入るの」

「いやだ。ぼく、お姉ちゃんと入るんだ」

「お姉ちゃんは、今日入れないのよ」

「どうして？」

「どうしても、駄目なの」

「ママのいじわる。じゃ、ぼくも入らない」

「耀、ママと入るの」

「いやだ」

「耀ちゃん、お姉さんとうろうか」

木実子は未佐をまじまじと見た。

「わあい、やった」

「じゃ、お洋服を脱ぎましょう」

未佐は木実子が目を大きくしてじつと見ているのに気付かない風を装い、耀に脱衣を促す。

木実子はまだ未佐に耀のことを話していなかった。未佐は耀の異常に気付くだろうか。耀は自分と違う未佐の体にどう反応するだろうか。彼女はふたりの後を追って洗面所のドアに立った。

「おっぱいだ。お姉ちゃんのおっぱい、ママより大きい」

「ダメ、くすぐったいからやめて。さあ、お尻を洗ってからよ」

風呂場からふたりの声がした。

木実子は大きく息を吐いた。椅子に腰を下して、テーブルのうえに開いたままになっている週刊誌(AERA '97.1.20)をたぐり寄せた。何度も見たページだった。彼女は虚ろな目で活字を追っていく。

「ダイオキシンは強烈な急性毒性のほかに、胎児に奇形を起こす作用、がんを増やす作用、免疫系に対する障害などがあることが、動物実験によって確認されている。

しかし、それらは体重一キロ当たり一日一〇〇〇ピコグラム以上摂取したときにしか表れない。ところが、赤毛ザルの子宮内膜症の増加が確認された『五ナノグラム入りのえさ』の摂取量を同じ単位に換算すると、一二六ピコグラムで、他の毒物と比べてひとけたも低い。最も微量でダイオキシンの影響が現れた実験なのである。

ダイオキシンがこれほど微量で動物の体に影響するのは、体に入ったダイオキシンは芳香族炭化水素受容体（E受容体）というたんぱく質とくっついて細胞内に取り込まれ、まるで本物のホルモンのようにふるまうからだ。

だから、ダイオキシン類は環境ホルモンとよばれたり、女性ホルモンのような働きをしているため、環境エストロゲンとよばれたりしている。エストロゲンとは主に卵巣から分泌されるホルモンで、これが増えたと子宮内膜症が進むことが分かっている。

男も無関係でない。妊娠中のネズミにダイオキシンを与えたところ、生まれてきたオスの生殖器官の重量が減り、精子が少なくなつたうえ、性行動がメスっぽくなつたという研究もある（AERA '97 1.20 p20）。

また同じページとつぎのページの下方には「日本の母乳汚染は世界最悪」というタイトルの囲みの解説記事があつた。リードの小見出しには「米軍の枯れ葉剤で奇形児が増えたベトナムよりひどい」とある。

木実子はこのタイトル見て、また身震いを感じた。

この囲み記事は本文中に載っているWHOが表にまとめた「各国における母乳中のダイオキシン類の平均濃度」を説明するものだった。この表には、十五カ国のデータが載っているが、日本は最高の二四〇五ピコグラムで、ベトナムは八〇二〇ピコグラムだ。ピコグラムは一兆分の一グラム。

その後の東京都の調査によると、初産婦の母乳中のダイオキシン濃度は経産婦の一・四倍にのぼり、高齢で第二子を出産するケースほど、濃度が高くなる傾向にあることが判明した。

ダイオキシン類の類とはなにか。木実子は森野がまえにダイオキシンは何種類もあるからだといったことを思い出した。

ダイオキシンはポリ塩化ジベンゾパラダイオキシン(PCDD)を略したものだ。構造の違いによって七十五種類に分けられるという。また、ダイオキシンと毒性や物理・化学的性質が似たものにポリ塩化ジベンゾフラン(PCDF)がある。これにも百三十五種類の構造の違いのものが存在する。

この二つを合わせて「ダイオキシン類」と総称することがある。だが毒性学の専門家は、コプラナーPCB(Co-PCB)というものなども、同じような毒性を示すため、これらもダイオキシン類に入れていく。

ダイオキシンの中で最も毒性が強いのが「2・3・7・8・四塩化ダイオキシン」だ。毒性を考えると時には、一般に、この最強のダイオキシンの量に換算して扱うことになっている。

ダイオキシン類は脂肪や肝臓に蓄積し、体からなかなか排出されない。人の脂肪組織でみると、体内に入ったものは十年経つてもようやく半分に減るくらいだ。女性の場合、母乳や胎盤を通じて体外に排出される。母親の汚染度が高いと、胎児や乳児が汚染されることになるという。

「ママ、パジャマは……」

耀が風呂場から裸で飛び出してきた。

「ハイ、ハイ」

木実子の目は自然に小さなペニスを捉える。ピーナツツのようにちよこんと突き出た小さなペニス、精果はあるかないか分からない。小さく萎んだままの精囊。

「お姉ちゃんと一緒によかったわね」

木実子は耀を捕まえ、パジャマを着せながら、ふと、未佐の裸像を思い浮かべた。思わず、耀をきつく抱きしめると、彼女はベッドに連れていっ

た。

「ママ、苦しいよ。ねえ、明日もお姉ちゃんとお風呂に入る」

「お姉ちゃんのほうはどうかな」

「一緒に入るって。お姉ちゃんも」

「そう……、よかったね」

未佐はなにを考えているのだろうか。木実子は彼女に軽い嫉妬を覚える。

耀はとろんとした目で「うん」という。しばらく眠気と戦い、ときおりまぶたを開けて、母親がそばにいるか確かめるように木実子に目を向けるが、それもすぐ止んだ。

彼女はしばらくじつと耀の寝顔を見ていた。未佐は耀の小さなペニスに気付いたのだろうか。やはり気づいたにちがいないと思った。

木実子は未佐に耀のペニスのことをどう話したらいいのか分からなかった。話すことより、いままで話さなかったことをどのように説明すれば一番未佐を傷つけないですむだろうか。

木実子は自信がなかった。耀と一緒に風呂に入ると言わなければ、そのことを自分から話す機会があったのだろうか。未佐に秘密を告白されながら、自分の秘密を隠しておいた結果となったことが彼女を苦しめた。

「耀は停留精巣だったの」

テーブルに戻ると、木実子は週刊誌を見ていた未佐に言った。

「……………」

「気がつかなかった?」

「全然。手術したの」

「ええ」

「全然、分からない」

「発育不全で……………」

木実子はガンのことを口にできなかった。

「発育不全?」

「小さかったでしょう」

「え? なにが……………」

「ペニス」

「……………あ、そうか」

「それであなたのほうは? 耀がなにか……………」

「押し込んでおいたから大丈夫」

未佐はあつけからんとしている。

「明日も一緒につて、耀、言ってるわよ」

「いいわ。耀ちゃんは手術してよくなったの?」

「あのとおりよ」

「そうお、わたしも……………手術することになるのかしら。でも手術すればす

むということでもなさそうだし……………」

「どういうこと……………」

「……………手術してしまうと、なんか別の人間になってしまうような気がするの」

「……………」

木実子はいまでも耀が手術してよかったのか分からなかった。なにかとんでもない間違いを仕出かしたような思いがふつと湧いてきて、いくらかもみ消そうとしてもなかなか消し去ることができずにいた。

「小さいころは男の子だった。でも親たちは変だとまえから気付いていたらしい。そしてひた隠しに隠してきたのね。父は転勤が多かったことが好

都合だったみたい。幼稚園に入るころから女の子として育てられたわ」

「……………」

「……こんな体のわたしを生んだ母を恨んだこともあったし、自分なりに悩んで、死のうと思ったこともあったわ……。手術してすべてを忘れ、これまで自分と決別することも考えたわ。でも……、その前に、このままの身体でどうしてもやっておくべきことがあることに気付いたの」

そのとき、突然、玄関のチャイムが鳴った。

「誰かしら、こんな遅く」

ふたりは互いに顔を見合わせた。木実子は椅子から立ち上がろうとしない。ふたたび、チャイムが鳴った。

8

わずかに開いたドアの隙間から、土田の顔が覗いた。

「お会いしたくないので、お帰りください」

木実子はドアをぴしゃりと閉じた。

「話したいことがあるんだ。それに……」

ドア越しに、土田の大きな声がした。

木実子は腹が立った。

「何時だと思ってるの。そんな大きな声を出して、なによ。近所に筒抜けじゃない」と言いながら、木実子は勢いよくドアを押した。

ゴツンと鈍い音がした。

今度はそつとドアを押して外を覗くと、玄関のテラスに額を抑えた土田がうずくまっている。木実子に気付いて、顔を上げた。

「酷いなあ。大きな瘤ができた」

土田はアルコール臭い息を吐いた。

「酔っ払って、大きな声を出して、迷惑よ。さあ、お帰りください」

未佐はいつのまにか姿を消していたが、木実子は未佐のことが気掛かりだった。未佐がここにいることを土田に知られたくなかったし、未佐に土田との昔の関係を悟られたくなかった。

「相変わらず冷たいんだなあ。きみが電話で変なことをいうから気になって来て見たんじゃないか」

土田はドアに手を掛け、不意に閉められないように構えている。

「あれはもういいの」

「よくないよ。そういわれても、ぼくのほうは気になる」

「じゃ、どうしてあの晩来なかったの」

「あの晩？ 会議が長引いてしまったね」

土田はゆつくり体を動かして、ドアのなかに足を入れる。

「坊や？ 一目会わしてくれない？」

「会ってどうするの。これは間違いなくわたしの子ですとも言うつもり？」

土田は反射的に一瞬身を引くような仕草をしたが、そのまま動こうとしない。酔いの勢いか、それとも木実子の話を頭から信じていないのか、しきりに額の瘤を撫でながら、上目遣いに奥を窺っている。

「きみ、一人？ 誰もいないの、坊やのほかに」

「母がいるわよ。休んでいるけど」

「じゃ、ちよつといいだろう、話ぐらいしても」

木実子はふと、土田がK省の委員会の委員をしていることを思い出した。「ダイオキシン問題の背景」の年表に出ていた全国のゴミ焼却炉を対象とした調査の結果がどうなっているのか。かなり前に実施したはずだ。そのなかでこの近くにある産業廃棄物の焼却炉がどう扱われたのか。

委員になって間もないとはいえ、土田はそのへんの詳しい事情を知っているかもしれない。

「……じゃ、片付けるから、ここで待っていて」といつて、木実子は今まで未佐と二人で話していたリビングルームに取って返した。

9

「いまから十年以上も前に、ゴミ焼却炉の調査を実施したことがあったでしょ、K省が……」

「え？ なんだ、急に、そんな話か。まあ、その前に、水ぐらい飲ませてくれないじゃないの。コーヒーをご馳走してくれとはいわないからさ」

「話が終わったら、コーヒーでもなんでもご馳走するわよ」

と言ってから、木実子は隣のダイニングキッチンテーブルで耳を澄ましていて、未佐の姿を想像して、いつのまにか馴れ馴れしく乱暴な言葉遣いをしていることを自ら嗜める。

「なんで、今度はそんなことに興味があるんだい？ 気候変動のほうはもう止めたのかい」

土田を突然研究室に訪ね、エアロゾルについて教えるを乞うたのはいつだったろうか。大気中に漂う微細な粒子が気候変動に影響をおよぼすひとつの

要因となることを知り、大気化学を専門としてエアロゾルを研究していた土田を知った。それがいつのまにか男と女の妙な関係に変化していった。それはまるで大気中で変化する化学物質のよういろいろな要因が相互の関係した捉えどころのない反応だった。

「先生こそ、どうしてエアロゾルの研究を止めたのですか。大気の化学から地上の合成化学物質汚染の専門家にいつから転進なさったのかしら？」

「……」

土田はにやにやしながら、ネクタイに手をやり、骨ばった細く妙に長い指で結び目を弄っている。木実子はいらいらしてネクタイのうえで微妙に自在に動く長い指に目をやりながら、内心で「これで三度目だわ。どうしてたびたびネクタイを触りたいのかしら。十回を超えたら必ず追い出してやる」と決めた。

「いいですか。この近くの産業廃棄物焼却施設が集中する地域のダイオキシンによる土壌汚染濃度は最高で七八〇ピコグラム／グラムです。雑木林のなかでも最高で五六〇ピコグラム／グラムもあるというじゃないですか。焼却集中地帯から南四キロにある公園の二か所の土壌でも九三ピコグラムと一〇四ピコグラムが検出されたそうですよ。これは一九九五年の調査結果だそうです……。いまはもつとひどくなっているかも」

「ふん、M教授の分析結果かね。ここはいまもなら改善されていないというのか」

「全然」

「それは酷い。市はなにをやっているんだ」

土田は調子よく木実子に合わせる。

「ほんと？ 先生もそう思いますか。ところで、例のゴミ焼却炉の調査は

八四年から八五年にかけて行なわれたんでしたよね。もう十年以上になるのに、その結果はどうなったのかしら。調査のポーズをしただけ？ 対策のほうはどうなっているんですか」

木実子は幾分上向きの生意気そうな鼻をびくびく動かした。彼女は研究所時代の議論好きの調子を取り戻す。

「あの調査とほぼ並行して『廃棄物処理におけるダイオキシンの発生メカニズムに関する研究』が五か年計画でスタートした」

「九〇年に委員会がダイオキシン抑制のガイドラインを答申したというんです。でもその答申は骨抜きというんじゃないですか。どうしてそうなったんですか。裏話をご存じありません？」

「裏話かね。どうしてこんなことに興味があるの」

土田はしばらくじつと木実子を見つめた。

「そんなことどうでもいいわ」

「変っている人だ。まあ、聞くところによると、ガイドラインの答申案をまとめたとき、実は検討会の作業部会で詳細なダイオキシンの排出濃度の目標値をつくっていたというんだ。だが、わけがあつて、ガイドラインの原案には採用されなかつたらしい」

「だから、どんなわけがあつたんですか」

「ふむ、そんな話は……、まず水を下さいよ」

「この一月にまとめた、最新の答申には目標値が盛り込まれたでしょう。それがなぜか、まえの答申には盛り込むことができなかつたのか。なぜですか？」

「いろいろなことがあつたらしい。今回の答申にしても、これが法制化されて、実際に対策にいかされるまでにはかなりの時間がかかるだろう」

「かなりの時間といつても、九〇年の最初の答申から七年目の今年の答申までの時間より短いでしょう。まあ、いくらなんでも今年中には法制化されるでしょう。でも、この七年間、行政当局はいつたいなにをしていたのですか」

「まえの答申のときに、排出濃度の目標値が決まっていれば、欧米に一〇年も遅れをとらずに済んだかもしれない。だがそのときは、全体の八割をしめる既設の焼却炉についてのデータが十分なかつたことと、自治体側から『突然、激しい数値を出されても対応できない。数値を入れるのは控えてほしい』という強い意見があつたという。それで目標値を出せなかつたらしい。目標値がないために、多くの自治体では具体的な対策に手をつけることをしなかつたらしいが……」

「全く行政のやることといつたら……」

「それでも新設部分の目標値を書き込んでいる。今後、十五年間で既設分の建て替えや炉の改良が進むことを期待していた……」

「十五年間でとは……、いつたいなにを寝ぼけたことを言っているんですか。その間、ダイオキシンの汚染がますます酷くなって、住民が苦しめばいいということかしら……」

「まさか、そうは思っていないかつただろうが、結果として……」

「結果として、T市をはじめ、多くの地域でダイオキシン汚染が酷くなつた、というわけですか」

「そんなところだらう」

「多くの被害者がでた。T市においてもその例外ではない」

「どんな被害が出たというんだ」

「ガンや新生児の死亡が増え、喘息やアトピー性皮膚炎を訴えるひとが多

い、それに……」と言いかけて、木実子は口を噤んだ。耀の病気もダイオキシン汚染のせいじゃないか。いや、そうに違いない。

「ダイオキシン汚染による被害というはつきりした証拠でもあるのかね」

「証拠？ いったいどんな証拠があればいいというの……」

木実子は真底腹が立った。彼女の変化に気づいたのか、土田は話題を変えた。

「近々、自治体の焼却場のデータが公表される。多分、大騒ぎになるだろうな」

「いったい、どんな大騒ぎですか」

「さあ……、どんな騒ぎになるかな」

「せいぜい、各地のゴミ焼却場で高濃度のダイオキシンをばらまいているといった程度のものでしょうか」

「それも各国の規制値とは桁違いの濃度のね」

土田は酔っているせいか、口が軽い。

「といっても、九六年のダイオキシン緊急対策の目安の八〇ナノグラムTEQ\立方メートルという数値はなによ、欧米に比べたら桁けた違いじゃないの」

TEQとは毒性等価量のこと、二百何十種類におよぶダイオキシン類の毒性を基準に毒性評価係数(TEF)を用いて一本化した値である。

「新設分の連続炉は〇・一ナノグラムナノグラムTEQ\立方メートルになった。既設分もいざれ見直されるはず」

「それにしても、なぜ、ゴミ焼却場だけを槍玉に挙げるのかしら」

「なぜって？ それは……」

「ダイオキシンにはさまざまな種類があるんですよ。えーと、ポリ塩化ジ

ベンゾパラダイオキシンは七十五種類と、それにポリ塩化ジベンゾフランが百三十五種類の、合わせて二百十種類だったわね」

「まあね」

「これだけ多岐に分かれていますとすれば、ダイオキシンの発生源がゴミ焼却場だけというのはおかしいわ」

「毒性のあるダイオキシンの大半が焼却過程から発生する」

「二百十種類のなかには毒性がないものがあるということね。じゃ、混乱しないように、取りあえず、発生源の問題と毒性の問題とに分けましょうよ」

「いいだろう。ダイオキシン類の発生源は、大別すると、燃焼過程、漂泊過程、化学過程の三つだね」

燃焼過程に該当するものとしては、一般の廃棄物や産業廃棄物の焼却、金属精錬、石油添加剤、たばこの煙、黒液回収ボイラー、木材の燃焼、自動車などの排気ガスなどからのものがある。漂泊過程で問題になるのはパルプなどの漂泊工程だ。化学過程は農薬製造などである。

「化学工業では農薬だけですか」

「ダイオキシンは化学過程の副生成物だからな。農薬に含まれるダイオキシンも製造過程での不純物なんだよ。もちろん、除去して純度を高めることも可能だが、カネが掛かる」

「とにかく農薬にはダイオキシンが含まれているんですね。日本では農薬を大量に使用しているのでしょ」

「水田で使われている除草剤のクロロニトロフェン(CNF)やペンタクロロフェノール(PCP)などにダイオキシンが含まれているが、それは毒性のない1・3・6・8-四塩化ジベンゾパラダイオキシンと1・3・7・9-四

塩化ジベンゾパラダイオキシン、それに若干毒性がある八塩化ジベンゾパラダイオキシンだがね」

「だから、ダイオキシン汚染においては、農業は問題でなく、とくに毒性の強いダイオキシンを排出するゴミ焼却場が問題だということですか」

「まあ、そういうことになる。この種の農薬を生産しなければこれらダイオキシンもできないが、毒性がなければ……」

「それはおかしいわ。この問題は毒性の評価と関連するので、二番目の毒性の問題に移りましょうか……」

「ダイオキシン類のなかで一番毒性が強いのが2・3・7・8-四塩化ジベンゾパラダイオキシンだ。これを一として、他の二百九種類の毒性を換算して係数を決めている。これが毒性等価係数(TEF)だ。何種類ものダイオキシンがあっても、それらの値はこの係数で換算した値ひとつで表示するわけだよ。たとえば、ダイオキシン類一〇ピコグラムというようにね」

「何種類もあるのを一本化して表示できればそれは大変便宜的で、それはそれでいいでしょうね。でも問題は毒性等価係数(TEF)に問題がないかということですよ。係数の基礎となる毒性評価が妥当かどうかということですよ」

「この係数は国際的に広く使用されているものだよ」

土田は権威ある方法だと言いたいらしい。

「係数の毒性はどのような毒性項目を選び、どんな基準で評価しているんですか？」

「まあ、ダイオキシンの場合は、急性致死毒性、催奇型性、発ガン性といったところかな」

「それだけで十分なんですか」

「ひとつの目安にはなる」

「ダイオキシンも環境ホルモン(内分泌攪乱化学物質)の一つだというじゃありませんか。新たに生殖毒性といった毒性からの評価を加える必要があるのでありませんか」

「たしかに、現在のダイオキシンの毒性評価には環境ホルモンの観点からのチェックが欠けているよ」

「環境ホルモンからのチェックを加えると、これまでの毒性等価係数(TEF)とは異なる係数となる可能性があるわけよね。というより、これまでの係数に新たなものが加わるということかしら」

「……………」

土田は口を閉ざしたまま、じつと木実子を見据え、またネクタイを弄っている。

「いままで毒性なしとゼロ評価されて、係数にカウントされていなかったダイオキシンが新たに毒性ありと評価され、新たにカウントされるようになるかもしれないということですね。つまり、環境ホルモンの毒性分だけ、毒性係数値が増え、本当はそれだけダイオキシン汚染の実態が酷いということですよ。逆にいうと、これまで環境ホルモンの分だけ、ダイオキシン汚染を軽く見ていたということになるわけですね」

「……………」

「なぜ、こんなことになったんでしょうか。農薬がらみのダイオキシン隠しには、ないかしら陰謀めいた感じがしますわ」

木実子は断定的に言った。

未佐のコメント

ダイオキシンには二つの顔があります。ひとつは「世界最強の毒物」といわれ、急性毒性、慢性毒性、発ガン性、催奇性をもつ「毒物の顔」です。もうひとつはホルモン様作用をもつ「環境ホルモン（外因性内分泌攪乱化学物質）の顔」です。

ダイオキシンは最強の毒物であるうえに、環境ホルモン物質でもあるのです。

日本にとつては、ダイオキシンの毒物の顔はベトナム戦争以来のよく知られた「古い顔」ですが、環境ホルモンの顔は比較的「新しい顔」なのです。このようなこともあつて、日本では「古い顔」のダイオキシンについては以前からいろいろ取り糺されてきましたが、これに対して「新しい顔」のダイオキシンは最近まであまり取り上げられることがなかったようです。

といつても、「古い顔」のダイオキシンに対しても、なぜか、ダイオキシンの汚染に悩むゴミ焼却場周辺の被害住民がいくら訴えても、行政サイドは規制値さえも決めようとせず、ずっと放置したままでした。その結果、いまでは、日本は世界最悪のダイオキシンの汚染国となつています。

「新しい顔」のホルモン様作用についても、実はかなりまえから指摘されてきました。たとえば、一九九一年七月の専門家たちの「ウイングスプレット宣言」がありますし、一般向けの本（たとえば『人類は滅亡への道を歩みはじめた（一九九四）』など）でもに取り上げられたことがあります。でもなぜか、日本ではつい最近まで、この問題についての議論は燃え上が

らなかつたようです。

このたび、シリア・コルボーン他の『奪われし未来（一九九七）』やデボラ・キヤドバリーの『メス化する自然（一九九八）』がつづいて邦訳され、ベストセラーになるに及んで、流れが大きく変わりました。日本でも、ダイオキシンの環境ホルモンについての出版が相次ぎ、マスコミも大々的に取り上げるようになって、俄然、社会の関心が高まり、議論が沸騰してきました。

これを背景に、官民にわたつて、これまた大々的な環境ホルモンに関する調査・研究が始まろうとしています。

ところで、女性ホルモンであるエストロゲンが合成されたのが一九三〇年代ですし、DDTのホルモン様作用に関しても以前から警鐘が鳴らされていたのです。これからいえば、ダイオキシンの環境ホルモンのほうが「古顔」だったということになります。

それはそれとして、今日、残留性の強い殺虫剤として知られているDDTは、一八七四年にドイツの科学者が合成した化学物質ですが、そのときはまだ、昆虫に対して強い殺傷力があることについては知られていませんでした。

DDTの昆虫に対する強い殺傷力が発見されたのは一九三九年になつてからです。発見者パウエル・ミュラーは、一九四八年に、その功績でノーベル医学生理学賞を受賞するのですが、その同じころ、アメリカの大学でDDTの動物に対する影響について調べられ、そのエストロゲン（女性ホルモン）類似効果を警告する論文が一九五〇年に発表されました。

それにもかかわらず、一九五〇年代には世界中で大量のDDTが使用されてきたのです。農村にかぎらず、いたるところで白い粉が散布されたの

もこのごろです。

かつては各家庭でも大掃除のときには畳の下にDDTを手づかみで撒いたりしたものです。キャンプ好きの人たちは山にはいるとき、汗知らずを叩くように、DDTの粉を体中に振りかけていました。そのため、三十年代半ばで肝臓ガンで亡くなるひとも出ました。

横道にそれましたが、環境ホルモンの警告があつたにもかかわらず、殺虫剤として世界中で大量のDDTが使用しつづけられてきたのです。

一九六二年、レイチェル・カーソンの『沈黙の春』が出版されてから流れが変わります。

一九七〇年代になりと、先進諸国を中心に、DDTの使用を全面禁止する国が増えていきます。日本では一九八一年にDDTの全用途で製造・販売・使用禁止となりました。

このように、環境ホルモンについてはかなり前から警告が発せられていたのですが、危険性に対する認識が甘く、社会的関心も低くかつたせいか、研究も進まず、まだ分からないことが多いようです。ですから、これを解明するための調査・研究が欠かせませんし、一日も早く全容が解明されることが期待されます。

しかし、その間、対策の方はどうなるのでしょうか。環境ホルモンの全容がわかるまで対策を考えることもしないのでしょうか。

これまで分かっていることだけでも、環境ホルモンのヒト、ことに発生過程にある胎児に対しての作用は衝撃的なものです。それもこれまでの常識では考えられないような一兆分の一グラムとかといった極低濃度で激しく作用するのです。

さらに衝撃的なことは、すでに環境が数多くの環境ホルモン様作用を有

する合成化学物質で汚染されており、複数の環境ホルモンによる相乗効果が見られるということです。合成化学物質がたったひとつの場合の汚染量では決して環境ホルモンとして作用しない極低レベルの量のもので、それがいくつか集まれば、環境ホルモンの作用をおよぼすというのです。

このようなことが分かっているようですが、それでも全容が分からなければ、対策ができないものなのでしょうか。また、全容が分からなければ、対策をする必要もないのでしょうか。

ダイオキシンの毒性等価係数(TEQ)をこのまま用いているのでしょうか。

環境基準など、ヒトを対象とする基準を考える場合には、環境のなかで一番影響を受け易い集団を基準対象とすべきです。

しかし、わが国の環境行政におけるこれまでの環境基準は、一般の成人(一般的な普通のケース)を基準にして算定し、それに安全係数を掛けて基準値を決めています。これは一般の成人を基準に算定した値より若干低くすれば、幼児や老人、あるいは病人などに対しても十分対応できるという考えに基づいているといえましょう。

このような考えかたに対して、胎児に対する環境ホルモンの作用はまさに「盲点を突く」といったものだったのでないでしょうか。

ところで、ヒトの卵巣がダイオキシン類に汚染されていることが東京大と国立環境研究所の研究チームによつて突き止められたそうです。まだヒトの卵細胞や精子への詳しい影響は明らかにはされていませんが、まえにも触れたように、動物実験では母体のダイオキシン汚染によつて受精卵がきわめて早い段階から悪い影響を受け、流産したり、子に奇形や生殖機能の異常が生じることが確かめられています。

日本は「古い顔」のダイオキシンの排出を野放しにして、稀に見るダイオキシン汚染列島を現出させました。いたるところで、まさに人体実験が進行しているというのが現状です。

それにもかかわらず、現在、日本の政府は不況や失業の脅威におののき、なり振りかまわず従来型の公共事業による土木工事中心の景気対策に身を任せようとしています。そしてダイオキシンを撒き散らしているのです。

これではたとえ景気が回復しても、さらに倍加したひどいダイオキシン汚染列島が現出することでしょう。そのうえに、「新しい顔」の環境ホルモン汚染が待っています。

日本国民をダイオキシン・環境ホルモンに曝さず、国民全員を人体実験に巻き込んでいようなダイオキシン・環境ホルモン汚染の恐怖を取り除くことこそ、民主主義国としての国民のための政治の基本ではないでしょうか。この基本を踏まえ、景気回復の道を探すことこそ、いま求められているものというべきでしょう。

世界中はいま、国民をモルモットとした日本の人体実験を固唾を飲んで見守っています。もつとも、そんな世界に向けて、詳細な人体実験の結果を発信することも、世界一の汚染国としての日本の世界に対する貴重な貢献でもあるでしょうが、「国破れて汚染列島残り」では、国際社会で物笑いにこそなれ、尊敬されることは決してないでしょう。

11

「もうひとつ不思議なことがあります。なぜ、日本では、K省もK庁もダ

イオキシン類からコプラナーPCBを除外してきたのですか」

木実子は口を尖らせ、追及をつづける。

「データが少ないと言っている」

「日本では、ポリ塩化ジベンゾパラダイオキシンにポリ塩化ジベンゾフランを加えて、これらをダイオキシン類といっているようね。でも世界では普通、これにコプラナーPCBを加えて、ダイオキシン類と言っているのではないですか。なぜ、日本だけが世界の例に逆らいつづけてきたのですか」

「データが……」

「先生は本当にデータが少ないと思っっているんですか」

「……………」

「もう三十年もまえになりますわね。PCBが混入していたというあのカネミ油症事件では、吹き出物や手足のしびれの原因物質が、たしか、PCBに含まれていたポリ塩化ジベンゾフランとコプラナーPCBだったんじゃないませんか」

有害化学物質であるPCB（ポリ塩化ビフェニール）は一九七二年に製造禁止となったが、処理されないまま各地の事業所に保管されたままだ。保管中に紛失したり、垂れ流したりするなど、いたるところで大きな問題となつている。

土田は口を閉じたまま、むつとした表情で、相変わらず、ネクタイを弄んでいる。

「三十年もまえから人体に影響があると分かっているのにデータが不足しているなんて、よく言えるもんですね。よほどの怠慢か、それとも業界とグルになつてなにかを隠したがつているのか……」

「コプラナーPCBは生産物に……」

土田はつい口を滑らしたというように、突然空咳をして口を閉ざした。

「そうだったんですか。コプラナーPCBを加えると、ダイオキシン類の値が三割から倍近くに増えるそうですね。それに現在全国にはコプラナーPCBを含んだ大量のPCBが保管されたままになっている。非常に危険だ。だから、コプラナーPCBがターゲットにされ、責任を追求されることを避けたかったというわけですか。このコプラナーPCB除外にも、省益優先と業官の陰謀の臭いがするわ」

どんな対策でも新たに実行するとなれば、それを受ける側になんらかの痛みが伴う。

痛みを受ける側は黙っていないで反論しようとする。反論されて困った事態が生じたときはそれをなんとか封じにかかると。

反論を封ずる一番よい方法は新たな対策を放棄することだ。そのためにはなんとか理由をつけて対策の実施を最初から先延ばしにしてしまうか、それとも、抜け道のある見かけだけの対策を講ずることだ。

12

「ダイオキシン汚染とゴミ焼却場とが結びつけられたのは、八三年に愛媛大学の研究グループがゴミ焼却炉の飛灰や残渣からダイオキシンを検出したのが最初のはじまりだよ」

土田はまるでゴミ焼却炉を対象にしたからこうなったと言わんばかりに言う。

「それはそうかもしれないわ。でも、そのあとの対応がなっていないわ。

あれやこれや言っても、結局、十年間、対策もせずに放置していた。その間、新生児の死亡など、取り返しのつかない被害が無数に出た。この責任は誰が負うのですか」

「ゴミ問題の担当課は愛媛大の研究報告に敏感に反応した。だがいろいろな事情があつて、その後の対応を遅らせた……」

土田は弁解じみたことを言う。

「ダイオキシン汚染問題をゴミ焼却炉と絡めたために、問題が二つ生じた。ひとつはダイオキシン汚染が長い間放置され、対策が遅れたこと、もうひとつは農薬やコプラナーPCBといった他の発生源からのダイオキシン汚染が隠蔽されてしまったことです」

「……………」

「ゴミの焼却炉や焼却施設に十年間も目を引き付けておいて、結局その間対策もせずに放置し、他の発生源の問題を胡散霧散にしようとした」

「そんなことは考えられない。愛媛大の研究報告のあと、専門家会議を開いて検討をはじめている」

「どんな検討が行われたのか知りませんが、それ以来、十年間、対策らしい対策がなされなかった」

「担当課は、対策を立てるために、健康に影響しない摂取量ほどの程度か決めてもらいたいと考え、関係課にあつた。化学物質の担当課は『意図的に作った物質のみが担当』といい、ゴミ焼却で発生するいわば非意図的な生成物であるダイオキシンを対象にすることを受け付けなかった。他省庁の関係課も同様だったらしい。結局、自分のところに戻ってきた。結局、対策を立てる課がその基準も決めることになった」

「基準が決められず、その結果、対策もできなかった、というわけ。ここにも陰謀があったとしか思えない」

「陰謀？ いったい、どんな陰謀があったというんだ」

「焼却にともない発生するダイオキシンが非意図的生成物なら、殺虫剤や除草剤に含まれているダイオキシンはどうなの。見て見ぬふりをして、貸しを作る。貸しははずれ利息を付けて返してもらおう。こんな消極的な陰謀もある」

「……きみは一体、なにを言いたいんだ」

「結局、ゴミ問題を担当するK省はこれに関する他省庁からの容喙を嫌い、一般の家庭や産業からの廃棄物を自省だけで単独に処理できるようにすることを考えたのではないかしら。そのため、他省庁がそれぞれ自省庁に係る問題を処理する時間的余裕として十年間を保証して、これと引き換えにこの問題に対する口出しを封じたということじゃないのかな」

「話としては上手くできているが、一体、なにを証拠にそのように考えるんだ」

「頭脳優秀な官僚らが証拠を残すようなへまをするもんですか。陰謀慣れの彼らのことですよ」

「まさか、彼らがそんなことを考えるとは……」

「強いて証拠らしいものをあげるとすれば……、ダイオキシン類の大発生源のひとつは農薬ですが、八〇年前後に、殺虫剤のCNPにはダイオキシン類が不純物として含まれていることが確認されていたというではありませんか。それでもN省は、CNPを使った農薬の登録を取り消ししようとしなかった。そしてメーカーが自主的に再登録の申請を控え、自然に失効するのに任せた。それでもCNPを使った銘柄の申請があれば再登録を繰

り返し、結局、すべてが失効したのは九六年九月だったそうですね。これはいったいどういうことですか。これはまさに、住民の健康を犠牲にした在庫整理だといつてもいいんじゃないですか」

「九〇年前後から、K省側はN省に対して何度も必要な試験結果を提出するよう求めてきたはずだ」

「とすれば、それにもかかわらず、N省はメーカーに対して危険が判明した農薬の在庫整理を手助けしたのは、なぜですか。こんな例をいちいちあげたら切りがないのでやめときますが、官僚たちは縦割り行政をフルに利用して業界を擁護しようと策動してきているが、これはべつにN省に限ったことではないわ」

13

ダイオキシンの発生源はゴミ焼却炉に限らない。それなのに、ダイオキシン発生とゴミ焼却炉とが結び付けられ、ダイオキシン汚染問題がゴミ問題に矮小化してしまっている。木実子には不思議でならなかった。

これは誰かが意図的に仕組んだことなのだろうか。

木実子には、ダイオキシン類の一大発生源である農薬を度外視している点と、ダイオキシン類にコプラナーPCBを加えようとしなかった点に、意図的なものを感じられてならなかった。これを裏付けるような情報を土田から引き出そうと躍起になったのも、彼女が直感的に陰謀の臭いを嗅ぎ取ったからにほかならなかった。

木実子はこれまでえた情報を整理した。

まず、廃棄物処理を管轄するK省を中心とするこれまでの経緯はこうだ。一九八三年十一月、愛媛大の研究グループがゴミ焼却炉の飛灰や残渣からダイオキシン類を検出したことを受けて、十二月、専門家会議を開いて検討をはじめたものの、当面の目標として、時間稼ぎがはかられた。

翌年の五月、差し当たり一日摂取評価指針を体重一キログラム当たり一〇〇ピコグラムと決めたが、これは当てずっぽうないい加減な数値に過ぎない。一二年後の一九九六年になって、これをK省は一〇ピコグラム、K庁は五ピコグラムとしている。

これと並行して、一九八四年から八五年にかけて、ゴミ焼却炉の調査を実施し、データを集め、八五年に「廃棄物処理におけるダイオキシン等の発生メカニズムに関する研究」を五カ年計画でスタートさせる。この時点でダイオキシン対策の実施は少なくとも五年先まで先送りすることになる。

データ集めの調査やメカニズム解明の研究は時間稼ぎの常套手段だ。それにしても、最初から五カ年にもわたる長期計画とは、はじめからダイオキシン対策の棚上げを狙ったとしか思えない。

研究開始から五年を経過した一九九〇年に、ダイオキシン類発生防止等ガイドライン検討会を設置し、ガイドラインをまとめた。目標値を巡って自治体側から「厳しい数値を出されても対応できない」と反発され、K省が自治体の言い分を呑み、既設分の目標値を削ってしまう。

この結果、すでに五年間放置されたダイオキシン対策が、さらに遅れることになった。K省と自治体が共同して、ダイオキシン対策を遅らせ、ダイオキシン汚染を激化させていったのだ。

一九九〇年、ガイドラインがまとめられるまえに、WHOがダイオキシン類の一日摂取量(TDI)(一日摂取し続けても健康に害がないとされる

一日当たりの値)を体重一キログラム当たり一〇ピコグラムとしたが、K省は自治体の言い分を優先させ、これを無視したのである。この無視は一九九六年まで続く。

一九九六年、K省は科学教研室による中間報告をまとめ、TDIを体重一キログラム当たり一〇ピコグラムとするが、その後、K庁は同五ピコグラムとする。そして一九九七年十二月の大気汚染防止法、廃棄物処理法の改正へとつながっていく。

この経緯のなかに、どのような陰謀が隠されているのか。木実子は陰謀の臭いを嗅ぎ分け、シナリオを書いていく。

陰謀シナリオはこうだ。

出発点は、ゴミ焼却炉の飛灰や残渣からダイオキシン類を検出したことを知ったときだ。K省サイドはこれを逆手にとって、ゴミ行政の再構築を計り、規制強化を策する。このために利用できるものはすべて利用し、この問題に対する他省庁からの容喙を一切封ずる必要がある。

これにはいろいろな事柄と関連し広がる可能性のあるダイオキシン問題の拡大を抑え、ダイオキシン対策が他省庁との共管事項にならないようにしなければならない。とくに煩い省庁との共管は避けることだ。

これには、ダイオキシン汚染とゴミ焼却とを緊密に結び付けておくことだ。これには二つの意味がある。ダイオキシン対策をゴミ焼却から発生するダイオキシン汚染に限定することと、ゴミ焼却から発生するダイオキシンを対象とすることにより対策の対象であるダイオキシンを非意図的生産物のダイオキシンに限定することができることだ。

この二つの防壁によって、ダイオキシン対策に対する他省庁からの容喙を防ぐことが可能となる。すなわち、ゴミ焼却から発生するダイオキシン

の対策だということで、廃棄物処理を管轄するK省がこのダイオキシンの対策に対して主導権を握ることができる。また、このダイオキシンがゴミ焼却過程から発生する非意図的生産物だということによつて、他省庁からの干渉を排除できるのだ。

とにかく、縦割り行政を最大限に活用するのだ。

こうして、さいわい、毒性等価係数が農業系のダイオキシン類を対策から排除するのに役立った。また、コプラナーPCBを除外することで、問題となつているPCBとも切り離すことができた。

こうして、K省はダイオキシン対策をゴミ問題の一環として自分の土俵で料理する基礎を築いていった。ダイオキシン発生という新しい事態に直面したゴミ処理の新しいシステムを構築するために、この問題の直接の当事者であり、かつ現場担当者である自治体の協力をうるべく、自治体の意向を聞く振りをして、ダイオキシン対策を長期にわたつて放置することにしたので。

木実子はもう一度シナリオを振り返る。なんとなく釈然としない。なにかが隠されている。なにか。もつと奥深いところで大きな力が働いているのかもしれない。そんな気がしてならなかった。

木実子は土田の目をじつと覗く。

14

「まさか、K省の担当者が住民の健康のことを考えずに、一方的に、自治体の意向のみで、ダイオキシン対策を左右するはずがない。妄想だ」

土田は目を剥いた。

「妄想？ 先生はなにか知っているんでしょ。まさか先生が彼らの謀議に加わっていたんじゃないんでしょね」

「バカバカしい」

「彼らは十年以上も対策を講じようとしなかった。このことだけでも犯罪的だ。これにはどんな申し開きも許されない」

「だれも積極的にそんなことをしようとしない」

「官僚は責任追及を逃れながら同じ結果を生み出す方法に長けている。ダイオキシン対策のケースでも対策の基礎データをうるための調査や研究で十分な時間を稼いでいる」

「……………」

「さらに、自治体の意向を聞いてダイオキシン対策を延ばしたように振舞う。こうすれば、ダイオキシン対策の遅れが発覚しても、住民の非難は直接の当事者である自治体に向けられるだろう」

「……………」

土田は相変わらずネクタイを弄び、にやにやしながら木実子を見ている。「自治体の意向を聞いた振りをしながら、自省に都合のよいゴミ処理システムを再構築しようとしたのだから。ダイオキシン対策の延期を自分で決めておきながら、問題が表面化したときには、そう決めた本人は陰に隠れ、自治体のみが生贓となつて住民の非難の矢面に立たされるといわけね」

「生贓？ どうかな……、考えすぎだよ」

「もう、いいわ、ネクタイをそんなに弄らないで。もう、帰って」

土田を追い出してリビングルームに戻ると、青い顔をした未佐がテーブルで木実子を待ち構えていた。

「先生とどういう関係ですか」

「昔の恋人」

ドア越しに隣で聞き耳を立てている未佐を想像して、木実子は返答を用意していた。

「耀ちゃんのお父さん？」

「……………」

木実子はテーブルから離れてテラスに面したガラス戸を開けた。冷たい風と一緒に息を詰まらすような臭いが侵入した。

「まだ燃やしているのかしら」

木実子は急いでガラス戸を引いた。

「耀がああなったのもこの汚染した臭い空気のせいだわ。この臭い汚染した空気のなかで育ったパセリや青菜のジュースを毎朝飲まされていたのよ」

「ズーっと？」

「耀がお腹のなかにいるときからズーっと」

「……………」

「ああー、なんとかならないかしら、あの臭いを嗅ぐとカーツとしてくるわ」

木実子は両手で頭を掻きむしった。

「耀ちゃん、おしっこ？」

未佐の声がした。パジャマの裾から手を入れて背中を掻きながら、耀が

ドアのところで頭を掻きむしる母をじっと見据えるような格好で立ちつくしていた。

第三章

16

一九九七年の四月と六月に、K省がゴミ焼却炉の排煙中のダイオキシンの濃度について、全国約一千五百五十か所のデータを公表した。このうち、排ガス一立方メートル当たり八〇ナノグラム以上排出している焼却場は百か所を超え、最高の濃度は九九〇ナノグラムだった。

同年十二月、大気汚染防止法と廃棄物処理法が改正された。ダイオキシンが新たに規制物質となり、排出規制がなされることになった。規制値は一時間当たり四トン以上の焼却能力をもつ新設炉が排ガス一立方メートル当たり〇・一ナノグラム（一〇〇ピコグラム）で、既設炉は一年後までに八〇ナノグラムまで下げ、五年後までに一〇ナノグラムとするといったものであった。

この規制値はドイツ、オランダ、デンマークの〇・一ナノグラムに比べると、既設炉の規制は甘い。ことに、現在、ゴミの焼却量が世界一で、焼却炉の数も世界一の日本では、なんとといっても既設炉対策がダイオキシン対策の要となる。それなのに、最悪の場合には、既設炉は今後五年間八〇ナノグラムのダイオキシンを出し続けることになる。これはドイツなどの八〇〇倍もの量だ。

ダイオキシンは物が燃えるときにも発生するので、まえから自然にはある程度のダイオキシンが存在していた。だが一九二〇年以前にはほとんど検出できないレベルだった。それがこの五〇年間に、化学工業の発達に歩

調を合わせて、環境中のダイオキシン濃度が劇的に増加してきた。

ことに、日本におけるダイオキシン汚染は、世界のなかでも飛び抜けているのだ。

データを見るときに気を付けなければならないことは、ダイオキシンあるいはダイオキシン類とは数多くある個々のダイオキシン類似物質の総称で、日本と欧米ではそのなかに含まれるダイオキシンの種類の範囲が異なることである。

欧米では、ポリ塩化ジベンゾパラダイオキシン（PCDD）とポリ塩化ジベンゾフラン（PCDF）の二つに、コプラナーPCBを加え、これらを総称してダイオキシン類とっている。コプラナーPCBは、毒性の強いダイオキシンと構造が近い物質であるという理由からである。

しかし、日本のK省とK庁は、表向きにはコプラナーPCBに関するデータが少ないという理由で、コプラナーPCBを除き、前二者のみをダイオキシンまたはダイオキシン類とっている。

ところで、日本では、かつてPCBが大量に使用されていたこともあって、廃棄や処理過程で、PCBとともにコプラナーPCBも環境に広がり、沿海部まで広く汚染しているのが現状である。これまで公表されているK省やK庁のダイオキシンに関するデータに、コプラナーPCBを加えると、ダイオキシン類の総量は三〇パーセントから倍に増えるという。

同じレベルで、欧米と日本とのダイオキシン汚染の状況を見てみよう。まず、自然環境における汚染状況はどうか。

毎日呼吸している大気の状態では、コプラナーPCBが含まれていない値の比較で、日本は都市部でも、バックグラウンドの非汚染地域でも、ヨーロッパやアメリカよりも濃度が高く、ひどいところでは数倍の高さである。

これに対して、水の汚染は、河川や工場排水の分析データがあまり見当たらない。なお、一九九八年度のK庁の調査結果によると、S市のA川から一リットル当たり十九ピコグラム、T市のS川から同七・八ピコグラムの値が検出されたという。

飲料水についてみると、井戸水や水道水にごく僅かダイオキシンが含まれている。もつとも、ダイオキシン類は油によく溶けるが、水には溶けにくい性質をもっている。そんなわけで水道水などのダイオキシン汚染は非常に低いので、大気などに比べて、水道水の飲用によつて体内に摂取する量はきわめて低い。

しかし、どんな低い濃度でも、小さい生物から大きい生物へと進む食物連鎖の過程で、水生生物においては、植物プランクトンで二五〇倍、動物プランクトンで五〇〇倍に濃縮されたダイオキシンが、小さな魚から大きな魚、魚を餌とする鳥類へと進むにつれて水中濃度の二五〇〇万倍にも濃縮されていく。

土壌について見ると、水の汚染が低いのに対して、土壌の汚染はかなり高い。ことにダイオキシンの排出源であるゴミ焼却炉の近くでは、非常に高い濃度を示している。O府N町にあるゴミ焼却施設の近くの土壌から一グラム当たり二千七百ピコグラムの高濃度のダイオキシンが検出された。その後、K省の調査で、同施設内の土壌から一グラム当たり五千二百ピコグラムを超える国内最悪の高濃度汚染が見つかった。なお、一九九八年十月十二日廃炉を発表。

ダイオキシン類は油に溶けるので、体内に入ったダイオキシン類は脂肪組織に蓄積する。このため、生物、ことに動物は大気や水や土壌に広がったダイオキシン類を体内に取込むと、そのたびに体脂肪に蓄積し、濃縮さ

れていく。こんなわけで、ダイオキシン類は脂肪を多く含む魚介類や肉・卵類、乳製品などの食物に多く残留しているのだ。

食物連鎖の頂点に立つ人間がダイオキシン類をどの程度体内に取り込んでいるかという点、近くに「産廃銀座」を控え、ダイオキシン汚染が心配されているT市がおこなった母乳のダイオキシン濃度調査によると、母乳の脂肪一グラム当たり平均一四・八ピコグラムだという。また、I県S町にあるゴミ焼却場周辺の住民の血液には、血液中の脂肪一グラム当たり約四百六十ピコグラムのダイオキシンが見つかった。国内外の調査の平均は二十ピコグラム程度である。

念のために繰り返し返しておくと、これまで取り上げた数字は、数多くある個々のダイオキシンの種類を総称したときの値だということである。これは四塩素化合物(2,3,7,8-TCDD)を一として、これをもとに個々のダイオキシンについて、それぞれの相対的な毒性から毒性等価係数(TEF)を決め、これによつて、全ダイオキシンを四塩素化合物に換算して表現したものである。簡単にいえば、ダイオキシン中、一番毒性が強い四塩素化合物の毒性を基準として、わかりやすく評価し直したものといい。

これは国際的に行われている方法であるが、ダイオキシン類の毒性評価係数(TEF)の問題がある。

ここでもう一度整理しておく、ダイオキシンのTEFは従来の毒性評価を基準としおり、急性毒性、慢性毒性、催奇形性、発ガン性などから毒性を評価しているにすぎないからだ。これらは合成化学物質によつて細胞が破壊されたり、遺伝子が傷つけられたりしてはじめて発現するものである。

ところが、ダイオキシンにはこれらの毒性のほかに、環境ホルモン様作

用もあるらしいのだ。

最近の研究によると、ダイオキシンが動物や人間に対して「内分泌攪乱物質（環境ホルモンといわれている）」として作用しているという。

数世代にわたる実験の結果から、ダイオキシンが性の発達や生殖に影響をおよぼしていることが分かっていた。ダイオキシンがエストロゲンとプロゲステロンの値を変化させたり、甲状腺ホルモンの濃度を変化させたりするのだ。まだ分からないところがあるが、要するに、ダイオキシンは複数の内分泌系を攪乱するということである。

それに高レベルの濃度ではもちろん、また、極微量のダイオキシンでも影響するという。妊娠一五日目のラットはオスの生殖器官がつかられはじめるときであるが、この時期に極微量のダイオキシンを与えたところ、成長してからも精子数が極端に低下していたという。

また、動物実験では、子宮内膜症との関連も指摘されている。子宮内膜症とは、本来子宮内にあるべき組織が卵巣や膀胱などで増殖する病気であるが、ダイオキシンが発病を促したり、病状を促進するのではないかと疑われている。

とすれば、これについての毒性評価も加えなければならない。

環境ホルモンにおいては、これまで毒性評価で仮定されていたような、用量がふえると反応も強まるといった単純な比例の関係は見られない。もっと複雑な関係がある。

二百何十種類のダイオキシンのそれぞれについて、もう一度環境ホルモンの面からのチェックをおこなない、この結果を加え、あらためて、ダイオキシンの毒性評価をおこなうべきである。

一九九八年五月二十九日、世界保健機関（WHO）の欧州地域事務局がダ

イオキシン類の健康リスクを評価するために開いていた専門家会合では、ゴミ焼却場などから発生するダイオキシン類について、健康維持のうえで望ましい一日当たりの摂取量限度の指針値（耐容一日摂取量（ \parallel TDI））を現行の体重一キログラム当たり十ピコグラムから一〜四ピコグラムに引き下げるとの結論をまとめた。

今回新たに発ガン性や環境ホルモンとしての作用についての動物実験や疫学調査の新しいデータを考慮して見直したものである。また、WHOのダイオキシン類の新摂取量限度値には、日本ではこれまで除外してきたコプラナーPCBをも含むものである。

K省の調べでは、日本人は平均して一日に体重一キログラム当たり〇・六三ピコグラムのダイオキシンを摂取しているが、コプラナーPCBを含めると一・六ピコグラムになって、WHOの新限度値に達してしまう。

17

電話が鳴った。

未佐は椅子に座ったまま、テーブルに屈んでいた体を起こして身構え、じつと耳を澄ませます。

呼び出し音が四度続いて、留守番電話になった。

「只今、留守にしております……」

アナンスが始まるとしばらくして、電話が切れた。

木実子の活動と関係があるのか、このところ、無言電話が執拗に続く。

「イヤがらせかしら、厭ね」

木実子に話すと、顔を曇らした。

だが今夜は珍しく電話がなかった。相手も木実子が反対集会に出かけているのを知っているらしい。

いまの電話がいつものイヤがらせのものだとすると、集会が終わって、木実子がそろそろ帰ってくるということかしらと思ひながら、未佐は首を回して身体の緊張を解した。

彼女はもう一度、テーブルに広げたままになっている『奪われし未来（シア・コルボーン他（長尾力訳））』のページに視線を落とした。

「……ダイオキシンには精子数の減少、生殖管の奇形や免疫系の抑制を誘発する性質があることが立証された（中略）……ダイオキシンによってオスの生殖器の発達に阻害されている可能性がある（中略）……ダイオキシンはこのように広範囲にわたる影響をおよぼすが、そのメカニズムの全体像がまだあきらかでない（中略）……ダイオキシンは内分泌系を攪乱し、ホルモンのバランスに影響を与える微妙な変化をもたらすが、胎児と大人とでは毒性が異なる（中略）……おとなのラットの場合はほぼ致死量なみの量のダイオキシンを与えないと内分泌系の障害が生じないが、子宮内（胎仔）か、母乳を介してダイオキシンに暴露したオスのラットは、極少量のダイオキシンで内分泌系障害が長期にわたって生じたという（中略）……妊娠十五日目に極少量のダイオキシンを投与させた親から生まれたオスのラットに精子数の減少や性行動のメス化がみられた（中略）……」

未佐はページを捲るのをやめ、本から顔を上げ、時計を見た。電話から一時間は過ぎていた。

「まだ、集会が終わらないのかしら。あの電話はいつもの嫌がらせじゃなかったとすると、誰からだったのかしら」

未佐は立ち上がって、階段を上がった。耀の部屋に近づき、彼女はそおつとドアを押しした。

「あつ」

未佐は思わず、声を出した。ベッドが空だった。

「耀ちゃん、どこ」

彼女はトイレを覗いた。木実子の部屋を覗き、家中を探した。耀の姿はどこにもなかった。

リビングルームに戻ると、未佐は腰が抜けたように、どかつと椅子に腰を下ろした。彼女はどうすればいいのかわからなかった。すつかり途方に暮れた。

夢中で本を読んでいるとき、目の前を影が通り過ぎたような感じがして、顔を上げたことを思い出した。未佐は急いで外にでた。

刺激臭がっーんと鼻を突く。

彼女は庭に回った。耀の姿はなかった。道路に出て、家の周りを窺った。やはり、耀の姿はなかった。

一瞬、大きな赤い炎が立った。

未佐は炎をめがけて走った。

「あれをやつけるんだ」

焼却場の近くを散歩したとき、耀が石を拾い、突然叫んだ。

野焼きの炎に向かって何度か石を投げ込んでいる耀の姿が浮かんだ。未佐は耀の幼い顔を思い浮かべながら、走り続けた。

前の路地を曲がる小さな黒い人影を見たような気がした。

「耀ちゃん、待つて。そんなことしちゃダメよ」

焼却炉の煙突が間近に迫る。突然、張り巡らされたトタン張りの高い塀

が通せんぼうをする衝立のように未佐の目の前に現れた。彼女は突進を遮った扉に沿って進み、黒い人影を追った。

彼女は襲ってくる黒煙に噓び、喘ぎながら耀の姿を求めた。だがどこにも耀らしい姿はなかった。

家に戻ると、閉めていたはずの玄関のドアが半開きになっている。

未佐は階段を駆け登ると、耀の部屋のドアを勢いよく押した。彼女は開放したドアから中を窺った。

ベッドには布団が掛けてあり、小さな頭が覗いている。

未佐は近づき、そおつと布団を持ち上げた。耀の寝顔が覗いた。顔を近づけると、頭髮から煙の臭いがした。彼女は布団をもとに戻すと、階段を降りた。

未佐はまた本の続きを読もうとページをめくった。だが彼女のこころはページから遠く離れてしまっていた。

18

あの夜以来、未佐は気づかれないように気をつけながら、できるだけ耀のそばにいて、毎日の行動を監視した。

木実子はダイオキシンの反対の市民グループとも積極的に接触をもちはじめ、外に出ることが多かった。もともと専門の自然科学系の知識があり、そのうえ研究所勤めも経験しているので、グループからも重宝されているらしく、耀を未佐に預けて頻繁に家を留守にした。

耀は未佐がそばにいても監視されているとは思っていないらしく、行動

は大胆だった。幼い頭ではそこまで気が回らなかったかもしれない。

一緒に散歩するときでも、相変わらず、焼却炉に向かって石を投げた。

「どうして石を投げるの」

「だって、あれはママを苦しめているんですよ」

「どうして……」

「ママがそう言っていたもん」

「いつ」

「まえに……、だからやつつけるんだ」

未佐が買物から帰ると、耀が自分の部屋で新聞紙のうえに散らかっている黒い粉を小さな手で集めている。

「なにしているの。お姉ちゃんも手伝おうか」

耀は急いで手に持っているものを後ろに隠し、恨めしそうな目で未佐をじつと見上げている。

「これ、なーあに」

「……秘密だよ、ママには言っちゃだめだよ」

「いいわよ、耀ちゃんとお姉ちゃんの秘密ね」

「じゃ、胸に手を当てて、誓って」

「ハイ、誓います」

「秘密を守りますってだよ」

「ハイ、秘密を守ることを誓います」

「じゃ、オーケーだ。これはね、これあの煙突をやつつけるんだ」

耀は手を前に出して開いた。線香花火だった。黒い粉は火薬の粉だ。「耀ちゃん、これなんか知っているの」

「火薬だよ」

耀はけろっとしてている。

「どこから持ってきたの」

「隣のお兄ちゃんから貰ったの」

「これでどうするの」

「これを集めて大きな爆弾を作るんだよ」

「まあ、爆弾でなににする気なの」

「あれをやつつける」

未佐は近くの中学に通っているらしい隣のおとなしそうな顔の男の子を思い浮かべた。未佐が急に出かけなければならないときがあつて、耀のことを隣に頼んだことがあつたが、それがきっかけになつて、このごろはよく隣に遊びにいっていた。

「耀ちゃん、もつと大きくなってからじゃないと……」

未佐はどうしたらいいのか分からなかつた。このことを木実子に報告すべきだろうか。黙って耀のやることを見守っていて、危ないことになつたときに注意するだけでいいだろうか。

耀が爆弾を作りたいという気持ちがよく分かる。それだけに、迷つた。ふと、未佐はあの中学生も同じ悩みに悩まされているのではないだろうかと思つた。

未佐は耀を突き放すことができなかった。突き放せば、耀はきつとあの中学生と爆弾を作ることだろう。

未佐と耀の共同作業がはじまつた。

といつても彼女は積極的に爆弾を作りたいと思つたわけではなかつた。なによりも彼女には、あの中学生と一緒に爆弾作りをする耀を見ていることができなかったのだ。

暫くして、雑木林のなかで小型焼却炉がつぎつぎと原因不明の小爆発を起こした。

19

「K省が公表したゴミ焼却場のデータはあまりあてにならないそうよ」

木実子はK省を訪れたとき耳にしたという。

「そうらしいわ。なんでも……」

未佐も森野から聞いていた。

調査に先立つて通知し、焼却場側で測定値を抑える操作をしていたという。焼却炉からのダイオキシン排出量を測定する際に、灯油を使って燃焼をよくするなど、通常ではやらないことをやって、測定値を低く抑えていたらしい。これに炉メーカーが積極的に協力していたというのだ。

「住民をバカにしているわ。なんのために調査をしたのか分からないじゃないの。メーカーはなにを考えているのかしら」

メーカーは自分が作つた焼却炉の性能評価が下落し、炉が売れなくなるのを心配しているのか。問題は、現実に稼働中の焼却炉からどの程度のダイオキシンが排出されているかだ。これを把握するために調査が実施されたのに、通常やっていないことをやってダイオキシンの排出濃度を下げようとしたとは、メーカーはどこまで住民を愚弄にすれば気が済むのか。

未佐は腹が立つて仕方がなかつた。こんなメーカーを許しておけない、こんどはメーカーがターゲットだ、と彼女はこころに決めた。

「そればかりじゃないのよ。分析業者が談合していたらしいの」

官公庁が発注するダイオキシンの測定業務の入札をめぐる、業者が「廃棄物処理に係わるダイオキシン類測定分析技術研究会」を作って談合を繰り返していたらしい。その疑いで、公正取引委員会が測定業者約三十か所を立ち入り検査したという。

当初、自治体が発注する測定業務をK省の外郭団体「財団法人H研究財団」の登録業者が独占していた。だが批判があつたために、同財団は登録制度を廃止したが、替りに登録業者はさきの研究会を作り、そこで受注業者や落札価格を決めていたらしい。

実際、自治体が発注する調査業務の大半を研究会メンバーが独占しており、外国企業と提携して安い価格で参入しようとした業者を締め出しているという。分析価格は、米国の八万から十三万円に対して、日本では三十三万から三十五万円と高値で固定している。

公取の立ち入り検査の後、K庁が調査分析の入札をしたところ、落札価格が従来より三割下落した。

「データは大丈夫かしら」

未佐は不信を露に、心配そうな顔で言う。安くした分手抜きされるのではないか。

ダイオキシン類の分析には、まず、調べようとする排ガスや焼却灰、大気や土壌、食品、血液や母乳など、サンプルの採取が行われる。つぎに、サンプルからダイオキシン類を抽出しなければならない。抽出にはトルエンなどいろいろな溶媒を替えながら十回以上繰り返す。これに三日から一週間かかる。そのつぎが分離精製である。土壌など不純物が多く含まれているサンプルはとくに厄介である。最後が、質量分析だ。濃縮した溶液を超高感度のガスクロマトグラフ質量分析計で、一兆分の一グラムまで測る。

これらの仕事はまだほとんどが手作業であつた。ダイオキシンの分析は二重ドアで遮断された実験室で、厳重に管理されて行う。ちよつとした手抜きや用いる器具のわずかな汚れもデータを狂わせる。

このように、排ガスの分析には、おおまかにいって、サンプルの採取、サンプルからのダイオキシン類の抽出（前処理1）、ダイオキシン類以外の有機物の除去（前処理2）、そして測定といったプロセスがある。それぞれのプロセスには複数の方法があつたり、かなりの熟練を要するのだ。

また、サンプル採取方法が各分析機関でまちまちだし、ふたつの前処理にはかなりの経験が必要である。さらに、測定ではガスクロマトグラフや質量分析計といった分析機器の運用者の熟練度がものをいうのだ。

ダイオキシンの分析には手間のかかる高度な技術が必要であるし、分析の精度や毒性データにも詰めなければならないところがまだまだ残っている。

それなのに、ダイオキシン排出濃度調査での操作といい、測定分析での談合といい、そこには住民に対する思い遣りや責任といつてものが微塵も感じられない。それどころか、規制する立場のK省と係わりがある団体が関与していたというのだ。

「こんな状態で分析技術を改良することができるのかしら。ことに、価格が決まっていれば、さらに精度を上げようとしたりしようとしめないじゃないの」

「とにかく、データの精度をチェックするシステムがなければ信用できないわ。住民側が分析した値と市側の値が違い過ぎる。まえの調査のとき、M教授の分析では九〇〇〜三〇〇、市は一四〇〜四八だったわね」

木実子は九五五年の調査結果を言っているらしい。

「焼却炉のほうも談合していたらしいわ」

未佐は森野が苦々しく言っていた話を思い出した。

市町村など地方自治体が発注するゴミ焼却施設の入札をめくり、メーカー十数社が談合を繰り返していた疑いで、公正取引委員会が独占禁止法違反で立ち入り検査をしたという。

ゴミ焼却炉は小型なほどダイオキシンが発生するおそれがあるとして、K省の指導のもとに焼却量百トン規模以上の中・大型炉への転換が進められている。また焼却灰の埋め立て処理が難しくなっており、焼却灰の発生が少ない新型炉の需要が高まりつつあるが、一九八〇年ころから、大型焼却炉「全連続燃焼式ストーカー炉」を対象に談合を重ねてきたという。競争入札に際して、メーカー間で、受注価格の下落を防ぐために事前に話し合い、落札価格や受注社を調整していたらしい。

談合は七三年ころからはじまり、七五年ごろに大手五社による「五社会」（あとで二社が加わり「七社会」となる）とか「環衛会」とかと称する組織を作り、七七年ごろから定期的に会合を開くようになったという。七八年に、公取が独占禁止法違反の疑いで立ち入り検査し、七九年に文書で警告したことがあった。八〇年ころから活動が再開された。数年前、これに後発の六社が加わり、「環衛α会」と呼ばれるようになった。七六年度から九八年度までの二十二年間通算で、処理能力の単位で十一社の受注実績は九割を超えているのだ。

調査データの操作といい、データ分析業務の談合、焼却炉売り込みの談合といい、未佐は腹立たしさを通り越して情けなかった。全く住民を食い物にするにも甚だしい。だがそれにしてもこんなことに携わる人びとはどんなことを考えているのだろうか。組織がそうさせるのだろうか。それと

もこの風土や社会がひとのこころを麻痺させ、なれ合い、安易な道を選ばせるのだろうか。彼らも住民のひとりであるだろうに……。

20

「ちよつと話したいんだが……」

森野だった。未佐は受話器の奥から伝わってくる森野の声をなにかしら救われるような思いで聞いた。

「いいわよ」

未佐は受話器を持ち替え、耳を澄ました。だが森野はいつものように話し出さずに黙ったまままでいる。

「いいわよ。どうぞ……」

未佐は繰り返した。

「電話ではダメだ。会って話したいんだ」

「……」

未佐は一瞬迷った。木実子が留守しているときに、無断で、森野を家のなかに入れるわけにいかなかった。

「どこか外でもいいんだ」

「耀ちゃんが……」

幼稚園の行っている耀を迎えにいかねばならなかった。

「急ぐんだ。夕刊の締め切りまでにどうしても話を聞いておきたいんだ」

「最近、この近くで爆発事件が起きているね。それにきみが関係していな

「いよね」

森野は未佐の顔を見るなり、玄関に立ったまま藪から棒に言った。

「子供を連れ二人組の仕業らしいという話なんだ。二人連れを目撃したというひとがいるんだ」

「どうして、わたしが……」と言いながら、未佐は森野をリビングルームに導く。

森野は「ただなんとなく」と低い声で応じ、未佐の後を追う。

「二人連れが耀ちゃんをわたしただと、どうして分かるの」

森野が腰を下ろすのを待って、未佐は訊ねる。

「じゃなければいいんだ。夕刊に出す記事に目撃者の談話を入れるかどうか迷っていたのでね」

「そんなのダメよ。目撃者の談話なんて、一人歩きするわよ」

未佐はあの中学生を思い浮かべた。耀と一緒に歩いて歩いているのだろうか。

「……………」

森野はじつと未佐の目を覗き込んでいる。

「どうして、そんな目で見るの」

「きみならやりかねない。焼却炉に爆弾を投げ込んでも不思議じゃない」

「どうして……」

「きみのことなら知っている」

「知ってるもんですか。森野さんにわたしの気持ちなんか分からないわ。」

分かるもんですか」

「ぼくの両親もきみの両親と同じくカネミ油症事件の被害者だった」

「……………」

「ぼくの皮膚のいろが浅黒いのもそのせいらしい」

「……だからどうだというの」

「きみがダイオキシシンや環境ホルモンに関心をもち、研究しているのも親たちを苦しませているPCBに含まれていたポリ塩化ジベンゾフランやコプラナーPCBといったダイオキシシン類を何とかしたいと思っているからじゃないのか」

「……………」

「だが研究に行き詰まったからといって、実力行使は問題だ。そんなことをしても問題解決にはならない」

未佐の体を血液が逆流しはじめた。彼女はなんとかして自分を抑えたかった。森野が一心に彼女のことを心配していることが分かるだけにつらかった。

「同情なんかして欲しくはないわ」

未佐は自分に言い聞かせるように言った。

「森野さん、わたしのこと、好き？」

未佐は立ち上がると、服を脱ぎ始めた。

「きみ、なにをする……、止めたまえ」

森野は床からブラウスを拾って、下着だけになった未佐の背に掛けた。

「半陰陽って、知っている？ わたしは女でも男でもない。女の性器と男の性器をもった半陰陽なの。さあ、よく見て」

未佐は下着を取った。

「未佐、そんなことをしてはいけない。未佐は未佐であることに変わりない。未佐はそのままがいいんだ。そのままの未佐が好きなんだ」

森野は未佐を強く抱き締めた。

「……………」

「……わたしには最近になって、こんな身体にした原因が分かりかけてきたの。そしてどう仕返しすべきか、あの耀ちゃんに教えられてわ。森野さん、いま、わたしはダイナマイトが欲しいの。強烈な爆発力をもったダイナマイトですべてを吹き飛ばしてしまいたい。わたしをこんな身体にしたすべてを」

未佐は森野の腕のなかでもがきながら、胸の奥から搾り出すような声を出した。

21

「法案を作成するのに、官僚たちはなぜ業界や自治体の意見を聞くのかしら。ダイオキシンの排出基準値を決めるのに、なぜ規制する側が前もって被規制者の自治体やメーカーの意見をきかなければならないのかしらね。なんのためにダイオキシンを規制するのかを考えれば、自ずから規制値が決まるはずなのに……」

「行政がなにかを規制するときは、業界などの規制を受ける側の意見をきいて、最大手が遵守できるぎりぎりのところで規制値を決める傾向があるわね。行政は自信がないのかしら。なんでも訴えられて訴訟になるのが怖いかいけど、本当かしら。毅然として、訴訟でもなんでも受けて立つてもらいたいわ。行政には住民のために戦おうという気持ちがないのかしら。わたしたちが陳情に押し掛けても、わたしたちに同情するまえに、まるで自分たちが訴えられた被告のように振舞うでしょ」

「そう、いつも言い訳ばかり。家に帰えれば、住民のひとりなのに、なに

を勘違いしているのでしょうかね。定年退職後も行政の一員のつもりかしら」

「定年後の再就職を考えて、業界となれなれしくしているんだわ、きつと」
「行政の当事者には住民が入っていない。お客さんは規制を受ける業界だけなのよ。やっぱり、わたしたちはもつと強くならなければ……。単なる数の力ではなく、知力が必要なのよ。法システムを活用して、戦うのよ」

「でもダイオキシンはわたしたちが毎日出すゴミと……」

「ゴミを減らすことよ。自分でできることはやる。これは大原則よ。それはそれとして、行政や企業にもダイオキシンを減らすことを求めるのよ」

「ただ求めるだけではどうかしら。なにかこちらから与えるものがないかしら……」

「毎日の献立を考えるが辛いわ。何もかも汚染されていて、毎日ダイオキシンを摂取しているみたいだわ。ゴミ焼却と関係ないコプラナーPCBの汚染のこともあるし……。食品の汚染のことを考えると本当に頭がいたい」

「そうよね。日本では九割以上が食品から体内に入るそうね。ことに魚介類からが多いというけど、肉より魚が健康にいいというし……」

「赤ちゃんに母乳を飲ませて本当に大丈夫なのかしら。世界中で一番汚染されているというじゃないの」

「母乳には胎児の段階で子宮で受けた悪影響を改善する力があるという報告もあるそうよ。母乳を飲ませることによって子宮での悪い影響を帳消しにするとか」

「本当？」

「PCB汚染と子どもの発達の研究によれば、長く母乳を飲ませるほど脳の発達がよかつたらしいわ」

「それは母乳がよかつたのか、授乳による母親とのコンタクトの効果か、

よくわからないんじゃないの」

「でもそれはアメリカの話でしょ。日本の母乳はアメリカの何倍か汚染されているんじゃないの。本当に影響がないのかしら」

「体に蓄積しているダイオキシンの母乳で排出されるというじゃない。一人の子どもを産み、六ヶ月間母乳を飲ませると、母体内のダイオキシン類が約四割、一年間飲ませると六割が赤ちゃんに移るそうだけど、本当？わたしの体から娘の体に移ったダイオキシンはさらにまた娘の子どもに移っていくというし……。こんなことなら、子どもをもつんじゃないか。娘に悪いことをしたわ」

リビングルームでは木実子が関係しているグループの会合が開かれていた。それぞれ問題意識を持った中年の主婦や未婚の女性が集まっているらしい。

未佐はダイニングキッチンでお茶の準備を手伝いながら、隣から漏れてくる会話を聞くとともになしに聞いた。彼女はなぜか、次第に立ちを覚え、いく自分を感した。

木実子がグループ活動するようになってから二年にもなるというのに、この程度しか進展していないかと思うと情けなさが先立った。五歳の耀でさえ、解決をめざして行動を起こそうと思うのにとすると、涙が出て仕方がなかった。

木実子が耀の病気の責任を追求したい気持ちは未佐にも十分理解できた。K省や市役所を訪ね、担当者に面会し、責任に所在を追求する木実子に、まるでわがことのように拍手を送った。だがダイオキシン汚染と耀の病気との間に因果関係があることを証明することができず、彼女の責任追求は容易に越えることができない困難な壁に直面した。

木実子が苦しいでいるらしいことは手に取るように分かる。とはいっても、木実子が挫折のなかからダイオキシン汚染放置の怠慢行政追求へと目標を広げ、グループ活動にのめり込んでいくのが、未佐にとつてまるで別世界の出来事かのような印象にしか写らないのだ。

未佐は次第に木実子を距離をおいて見るようになっていった。彼女は森野とのことも耀との爆弾作りも木実子に話すつもりはなかった。いまの木実子には耀の気持ちを理解することができないだろうと思ったからだ。

22

「森野さん、なにかいいアイデアはないかしら。行政を変えたいのよ。いくら追求しても、担当者はただのらりくらりするだけで、まるで『暖簾に腕押し』なの……」

何年経ってもこれといったの成果が上がらないことに苛立ちながら、木実子は事務所に取材にきた森野を掴まえ、自分たちの活動が行き詰まり状態にあることを訴える。

「行政がダメなら、政治を動かすことですね」

森野はいささか冷ややかに言った。

「県会議員や代議士に会って陳情したけど、なんにも変わらないわ。あなたがたに生きる権利があるように、企業にも自由に活動する権利があるというのよ。まったくいやになるわ。ダイナマイトでも投げ付けてやりたいわ」

「ダイナマイトですか。誰かもそんなことを言っていましたよ」

「……………」

木実子を一瞬身を引いた。

「……やはり人まかせでは問題を解決することができないのかもしれない」

森野は木実子を見つと見た。

「テレビや新聞でじゃんじゃん取り上げてくれないかしら。そうすれば社会の関心も高まるし……、森野さん、問題の核心に迫った問題提起をしてほしいわ。あつと言うような……」

「行政まかせや政治まかせでは何も変わらないでしょうね。かといって、企業を非難するだけではなんの意味もないし……」

森野は大学時代の友人が預かってくれと置いていった段ボールのなかにあつた雷管のない工事用のダイナマイトを思い出した。あれは確か押し入れの奥にしまいこんであるはずだ。それにしてもなんてナイーブなんだろう、と木実子を見て彼は思う。

森野は取材を通して、日本の行政担当者たちの責任逃れの問題処理の仕方をいやというほど見てきた。彼らは波風が立つのをひどく嫌う。現状維持が最善と思っている。誰からも文句を言われたくないし、指図を受けることも厭だ。権力や大きな声には弱いし、利益や利権に目がない。だから、問題が生じると、まず不安を打ち消すことを第一に考える。決して根本的な解決を図ろうとしない。現状を変えるような根本的な解決策はつねに先送りとする。

このような連中を相手に、友だち同士のサークル活動のような小さなグループがいくつあっても太刀打ちできるはずがないし、行政や政治を動かす力になるはずがないではないか。彼らに太刀向かおうとするなら、地方議会や国会に代表者を送り込むことができるほどに会員数を増やし、組織

を大きくすることだ。そして専門家集団を組織して活動の戦略を練り、活動をもっと広くかつ多角的に行い、あらゆる手をつかって行政や政治に働きかけ、これらを動かすのだ。だがこんなことよりもまず、自分たちで地球環境を損ねる負の行為（マイナス）をひとつでも取り除いていくために行動を起こすことだ。

23

「お姉ちゃん、いっぱいになったよ」

未佐は森川が工事用のダイナマイトをどこから調達して届けてくれるかもしれないとかすかに期待していた。それまで待とうと、耀を騙して、線香花火から火薬を取り出す役をやらせ、決行の約束を一日、一日と延ばしてきた。

だがそれも限界だった。用意した茶筒が一杯になったという。これ以上延ばせば、耀はきつとカンの火薬を隣の中学生のところに持つていくだろう。

「一杯になったの。じゃ、お姉ちゃんが預かるわ」

小型の茶筒には線香花火が束ねたまま押し込んである。これでは爆発しても炉を吹き飛ばすまでにはいくまい。未佐は一度、森野に電話してみようかと思った。

「いつ、やるの」

「……いつがいいかな」

「ママはお出掛けでしょ」

「いいわ、じゃ、今夜ね」

未佐は耀に紺のセーターを着せた。ズボンも黒に近いチャコールグレイにした。着替えた耀を見て、未佐は迷った。森野が言っていた二人連れだという目撃者の証言が気になった。黒装束に近い子供を連れて歩けば、一目で疑われてしまう。かといって、白や明るいグレイのセーターでは、見つけてくれと言っているようなものだ。

「まあ、いいか、耀ちゃん」

「うん」

「じゃ、まだ二時間あるから、耀ちゃんの部屋で待ってて。出かけるとき起こすから、少し眠ったら」

「お姉ちゃんは？」

「ちよつと用事があるの。着替えてから、出かけるわ。直ぐ帰る」

「ひとりでいっちゃダメだよ」

「じゃ、これを耀ちゃんが持っていて」

未佐は茶筒を取り出した。

着替えを終えると、未佐はドアの隙間から耀の部屋のなかを覗いた。ベッドで耀が寝返りを打っている。彼女は足音を殺して階段を下りた。

電話のままで立ち止まったが、思い直して受話器をもとに戻した。外に出た。

暗い夜だった。住宅街は夜が早い。まだ八時を過ぎたばかりなのに、門灯も消え、息を止めているように、ひっそりと静まり返っている。

未佐は背後から襲ってきた煙に咽せり、咳き込む。振り返ると、北の空が明るかった。焼却場の照明灯の明かりが野焼きや焼却炉からの煙に乱反射しているのだろう。

彼女は住宅街の外れにあるコンビニをめぐり走った。

「森野さんは……」

途中まで言っただけで「席にいないよ」とぶつきらばうな返事が返ってきた。

未佐は切られた受話器をもったまま、しばらく立っていた。なにかいい考えがないかと頭を回したが、なにも浮かばなかった。

「なにしている」

突然、背後から声があった。

森野だった。

「……いま、電話したところ」

未佐はようやくやく掠れた声で言うと、電話から離れて歩き出した。森野も黙って付いてくる。彼女は顔を隠すように、徐々に足を速めた。今夜の決行を森野に悟られないかという思いが強かった。

「きみ、これ」

後ろから森野が声をかけた。

振り向いた未佐にハトロン紙の袋を差し出す。なかに丸い筒状のものが二本入っている。彼女は立ち止まって、森野をじつと見た。

「強力なやつだ。気をつけるんだ」

森野は低い声で「廃棄物の投入口から炉の火のなかに投げ込めばいい。投げ込んだら、急いでできるだけ遠くに逃げるんだ」と言った。

「……ありがとう」

未佐は袋を奪うようにして受け取ると、森野を残して家に戻った。耀はベッドで眠っていた。

ダイニングキッチンのスイッチを押した。蛍光灯の無機質の青味がかつ

た白い光が目を一直接線に射る。喉が空からだつた。

未佐は水道の栓を開き、しばらく迸る水を眺めた。それからガラスのコップに水を満たし、一気に飲み干す。

リビングルームに入り、椅子に腰を下し、壁の時計を見上げた。まだ一時間も経っていない。

未佐はテーブルに置いたハトロン紙の袋をしばらく眺めていた。おそろおそろ上からそつと撫でた。太い蝋燭の感触だ。彼女は寒気を覚え、身を震わせた。

24

北風が刺激臭のある煙を吹き付ける。

未佐が噎び、耀が咳き込む。彼女は耀を抱え込み、煙の襲撃から彼を守る。

二人は北の方のほんのりと明るい空をめざした。耀は茶筒を胸に抱え、小走りに付いてくる。

家並みが消え、雑木林の暗い影が見えた。二人はさらに足を速める。照明灯の光に照らし出された焼却場を囲むトタンの高い塀が見える。

鼓動が激しく鳴った。耀の鼓動が握り締めている手の指を通して伝わってくる。

「こつち、あそこに穴が開いているんだ」

耀が走り出した。

「待つて、煙が流れてこないほうに廻りましょ」

煙突から激しく黒煙を噴き出している炉の直ぐそばにまで廃材の木屑がうず高く積んである。少し離れたところに数台のトラックが並んで駐車してあった。

あたりには人影がなかった。未佐と耀はトラックの間を通り抜け、廃材の山の間を身体を屈めて、扉が開けたままになっているのか、赤い火が見える炉の口に近づく。

「一緒にあのなかに放り込むのよ」

未佐はダイナマイトを取り出し、耀を促した。

ライトグリーン茶筒が耀の手から離れた。ふらふらと弧を描いて茶筒が飛んでいく。その横を棒状のダイナマイトがプロペラのように回って追いついて炉口のなかに飛び込んだ。高く上がった茶筒は炉口まで届かず、手前で小さくバウンドして散らばった廃材の木屑のうえで止まった。

耀は突然走り出した。茶筒を追い掛け、炉口に近づいていく。

「ダメ、逃げるの」

耀は茶筒を拾うと、炉口のなかに放りこむ。未佐は必死に追い掛け、耀の手を取り引きずるようにして炉口から逃げた。

その瞬間、大音響とともに、火柱が立ち、焼却炉が木つ端微塵に吹き飛んだ。

焼却炉の残骸が空中高く飛び、コンクリートやレンガの瓦礫が飛び散った。ビニール片やゴミ屑が飛び、砂塵が舞い上がり、巨大な噴煙が立ち上った。

噴煙とともに舞い上がった塵芥や瓦礫の小片がつつぎと落下し、辺りを埋め尽くしていく。

爆発によって生じた火災も次第に下火となって、辺りを照らしていた炎

も消え、暗闇が戻った。
遠くで、パトカーのサイレンがした。

第四章

25

「おい、この辺りじゃないのか」

助手席の年かきの警官が前方に顔を向けたまま、呟く。

トタン板を張り巡らしたような塀がつづく。ハンドルを握っている若い警官がブレーキを踏み、減速しながら、パトカーを塀のある道路端に寄せていく。

ヘッドライトに照らされた先に、トラックの出入り用の入口があった。

扉にはトタンで目隠しが施され、鎖が巻かれ、施錠されている。

「どこか、なかを覗けるところがないかな」

パトカーから降りた一人が懐中電灯を片手に塀の周りを歩き回る。

爆風で吹き飛ばされたのか、塀の一部に大きな穴が見つかった。警官のひとりになかに入る。つづいて、もうひとりの警官がつづいた。

一面に瓦礫が飛び散り、足の踏みようがないように辺りを埋め尽くしている。

「お、あれは……」

ふたりのライトに、こんもりと盛り上がった黒い物体が浮かび上がった。

ふたりは瓦礫をかき分け、近づいていく。

異臭が鼻を突く。

「焼死体か」

性別さえ不明のほどに黒く焼け爛れた大人と子どもの焼死体だった。大

人の焼死体が子どもの体を庇うようにしっかりと抱き締めている。

「おい、本署に連絡するんだ」

若い警官が塀の穴をめざして走り出した。

そのとき、突然、天空から一条の光束が延びて地上を照らした。折り重なって倒れている二人の焼死体を捉えようと、幾重にも光りの波が重なり、一面に光が溢れた。

光のなかで、耀を庇うように覆い重なって倒れていた大人の焼死体が幽かに動いた。

大人の焼死体が身を起こした。子どもの頭を撫で、背に手を入れ、身体を起こしにかかる。

子どもはいま目覚めたように、暫く首を回し、辺りを見渡す。

大人はその様子をじっと見守っていた。

やがて、大人の焼死体は子どもを促し、光束のなかに立ち上がる。

光束が大きな円を描き、若い女と男の子を捉えた。

若い女が男の子の手を取って歩み出し、ふたりは光束のなかを天へ昇っていく。

「おお、あれは……」

若い警官が空を指差した。

年配の警官が振り返り、指差す方に目を向ける。

星一つない暗い天空を人の形をした光が翔てゆく。ひとつは大きく、もうひとつは小さな眩しく光るふたつの物体が尾を引いて東の空を翔ていった。

「あれは……。おい、もう一度現場を確かめよう。本部への連絡はそれからだ」

年かきの警官が踵を返した。若い警官が駆け足で後を追う。

「やはり、あれは……」

焼死体が横たわっていた辺りを懐中電灯で何度も照らす。焼死体は消えていた。年配の警官は現場を確保しなかったことを悔いた。

「あれ……、どこへ消えたのか」

若い警官の素頓狂な声が響く。

26

「お子さんのことで、ちょっとお尋ねしたいのですが……」

あくる日、突然、刑事が訪ねてきた。爆破事件にかかわりがあるらしいことをにおわせ、耀の昨夜の行動やアライバイを聞きたいというのだ。

「耀が……」

「あの付近で子どもを連れられた若い女を見たという人がおりましたね。お宅のお子さんじゃないかと……。なにかこころ当りはありませんか」

「べつに……」

木実子は全身から血の気が引くのを感じた。

「現場に子どもと大人のふたりの焼死体があつたらしいのですが、それが消えてしまったので……。お子さんはいまどこに……」

「……………」

一瞬、目まいに襲われ、木実子はしゃがみこむ。

「もし、お子さんが戻られたら、本署へ連絡ください」

刑事は木実子の様子を窺っていた。しばらくすると、もう用がないとい

わんばかりに、急に踵をかえした。

木実子は耀の死を信じられなかった。なにか大きな力が突然彼女を襲い、耀を彼女から無理やり奪い去ったように思えた。

耀は生きている。どこかできつと生きている。遺体もないのに、どうして耀が死んだと分かるのだ。

木実子はどうしても耀の死を受け入れることができなかった。

それにしても、耀と未佐が一緒だったらしいとはどういうことか。未佐が耀を唆し、連れ出したにちがいない。木実子は未佐をどうしても許せなかった。

未佐にまかせきりにしていたことを悔いた。いつのまにか未佐が耀のころを捉え、自分から耀を奪い、死の道連れに連れ出したにちがいないのだ。木実子は自分が耀をほったらかしにしていたことも忘れ、未佐に対して激しい憤りを感じた。だがそれは突然の出来事に前後を忘れた木実子の未佐に対する嫉妬だったかもしれない。

木実子はどうしても耀を探しださなければならぬと思いつつ、激しい憤りに我を忘れ、どうすることもできずにいた。

27

「耀ちゃんはどこ。耀ちゃんはいないの」

テレビで焼却炉の爆破事件を知って、突然、貴世が帰ってきた。

「……………」

「やはり、耀だったのね」

涙ぐむ娘を見て、貴世は肩を落とした。

「木実子……、実は、耀と一緒に死のうと思っていた」

黒いふさふさした頭髮がすっかり白くなつてすかすかに薄くなっている。

「耀の身体が変なので、お前には内証で、病院に連れていった。毎日お前に飲ませていたグリーンジュースのせいかと思つて……。わたしの友だちで、ほら、お前も知つている野村千代子さんが『こんなところで野菜をつくつちや駄目』といつて、ダイオキシンのことを教えてくれたのよ」

「どうして、そのときにそのことをわたしに話してくれなかった……」

木実子は母のもとに五か月の身重の身体で転がり込んだ頃からのことを思い浮かべた。

「そのころはもう、お前がお乳を飲ませることも減つていたし、なにやら忙しそうにしていたからね。それにそんなことをお前に話したからといって心配をかけるだけで、どうにもなるものでないし……。とにかく、お医者さんに診てもらつてからと思つて……」

木実子は耀が離乳したら、また、仕事に復帰しようと考え、準備を始めていた。耀を育てるためにも働かなければならなかったし、一日中、母と一緒に同じ屋根の下で過ごすことも、なんとなく鬱陶しい感じがして厭だつた。

「……耀が男の子でも女の子でもないとき、一緒に死ぬことしか考えられなかった。でもできなかった」

貴世は何度も同じことを繰り返す。

「……………」

木実子は返事すらしなかった。次第に、木実子は母を責める力も反発する力も失い、無口になった。

耀を死の道連れにしようとしたのは未佐だけでなかったのだ。彼女は母親としての自分が耀から遠く離れていたことを思い知らされた。だが未だに耀が死んだことすら信じられずにいる彼女はただ茫然として、何年かぶりに現れた別人のように老けた母の顔を見ていただけだった。

「……ひとり死のうと思つた。でも耀の声が追い掛けてくるの。北海道にいつてもまだ追い掛けてくる。とうとう死ねなかつた。温泉場で仲居をしているとき、お客さんから手術して元に戻つた話を聞いたの。耀も手術をすれば直るかもしれないと思ひ、ほつとしていたところだった。それが突然死んでしまつたなんて……」

貴世は両手で顔を覆い、肩を震わせた。

「耀がああなつたのはなにもお母さんのせいじゃないわ。それに環境ホルモンはダイオキシンのだけが問題というわけでもないし……」

ダイオキシンの環境ホルモンのことを知らなければ、木実子もつと取り乱したことだろう。耀が成人になつてひとり悩む姿を見ずにすんだことは彼女にとつてむしろ幸いだったかもしれない。こんな複雑な思いのなかで、木実子は未佐が自分以上に耀の気持ちを理解していたように思え、こころが疼き、激しい嫉妬を覚えた。

木実子は母が大粒の涙を流して泣く姿を見入っているうちに、なんとなくこころが洗われていくような気持ちになつた。母に対するこだわりも未佐に対する嫉妬も次第に薄らいでいった。耀が未佐に手を引かれて微笑みながら近づいてくるような気がした。

突然、木実子は未佐に頼んで仲間の会合で環境ホルモンについて話してもらつたことを思い出した。あの話の中にこのたびの未佐と耀の行動計画が隠されていたのではないか。

そのとき、彼女は自分のこれまでの行動の間違いに気付いた。未佐が自分たちの前で抜本的対策の必要性を力説していたのも、自分たちの行動を批判してのことだったにちがいない。

28

未佐が木実子の仲間の集まりで行った環境ホルモンについての話

環境に廃棄されたり放出されたりして環境中に留まっている合成化学物質のなかに、生体に対して女性ホルモンであるエストロゲンのようなホルモン類似の作用をするものがありますが、これを「環境ホルモン」と呼んでいます。正式には「外因性内分泌攪乱物質」といいますが、現在確認されているものだけでも、ダイオキシンなど七〇種類以上あるそうです。

たとえば、猛毒のダイオキシンのほかに、熱媒体や絶縁体などとして使用されてきたPCB、主として殺虫剤として使われたDDT、船底などの貝附着防止剤として用いられてトリブチルスズ、樹脂の原料であるビスフェノールAや界面活性剤などに使用されるノニルフェノール、プラスチックの柔軟剤などのフタル酸エステル類、発泡スチロールやプラスチックなどの原料であるスチレン類など、数多くの合成化学物質が疑われています。これまで人間がつくりだしてきた合成化学物質は一五〇〇万とも二〇〇〇万いわれますが、そのうち現在使用されている合成化学物質は八万から一〇万種類だそうです。ですから、環境ホルモンに該当する合成化学物質が七〇種類だけということは考えられません。まだまだ増えていくことで

しょう。

最近、生物界では、汚染海域に棲む海鳥や魚などに生殖行動の異常がたびたび見られるようです。エストロゲン類似物質の蓄積によって、つねに排卵状態に固定されるようになるという動物実験の結果もあるので、このような異常行動もエストロゲン類似物質の影響らしいと疑われているのです。

ダイオキシンも環境ホルモンのひとつですが、最近の研究によると、ダイオキシンが性の発達や生殖に影響をおよぼしていることが分かりました。ダイオキシンがホルモンであるエストロゲンとプロゲステロンの値を変化させたり、甲状腺ホルモンの濃度を変化させたりするのです。まだ分からないところがあるのですが、要するに、ダイオキシンは複数の内分泌系を攪乱するということです。

それに高レベルの濃度ではもちろん、また、極微量のダイオキシンでも影響するといえます。まえにもお話したことがあるかもしれませんが、オスの生殖器官がつくられはじめの時期のラットの胎仔に極微量のダイオキシンを与えたところ、成長してからも精子数が極端に低下していたそうです。

また、動物実験では、子宮内膜症との関連も指摘されています。子宮内膜症とは、本来子宮内にあるべき組織が卵巣や膀胱といった子宮外の臓器等で増殖する病気ですが、ダイオキシンが発病を促したり、病状を促進するのではないかと疑われているのです。

これらは動物実験で確認されてことにすぎませんが、最近、人の卵巣までがダイオキシン類で汚染されていることが突きとめられました。このような生殖器官の汚染は卵子の質を変え、受精卵の発達に影響を与える恐れ

があるのです。

とにかく、わたしたち人類を取り巻く環境は、現代科学技術文明のつくり出すもろもろの化学合成物質によって汚染され尽くしています。困ったことに、何万とある汚染物質のなかには、予期に反して、人間にとって必須のホルモンに似た物質が混じっているというのです。

ホルモンは人体のいろいろな機能を調整する役目をもつ重要な物質です。それなのに、PCBやダイオキシンなどの人工に合成された化学物質が人体(細胞)に対して、まさに、女性ホルモンのひとつであるエストロゲンと似た効果を示す、というのです。

これらのエストロゲン類似物質の環境汚染によって、世界の女性は一生の間、のべつ幕無しにエストロゲンにさらされることになっているのです。その結果、人体の重要な制御機構が狂わされている可能性があるというわけです。

PCB(ポリ塩化ビフェニル)という言葉は何回となく耳にしたり、目にしたりしたことがあると思います。例のカネミ油症事件(一九六八)のときにマスコミを販わした化学合成物質です。

この事件は米ぬか油の製造過程でPCBが混入して、これを食べた人に発生したPCB油症です。そのときの症状は嘔気、無気力、皮膚への色素沈着、皮膚障害、消化器障害、肝障害などでした。

PCBが合成されたのが一八八一年で、商業生産は一九三〇年に米国に始まって、第二次世界大戦とともに生産が急増しました。日本では一九五四年に生産を開始しましたが、先の事件後、魚介類の汚染のほかに母乳からも高濃度のPCBが検出されて、使用規制の要望が強く、一九七二年に生産を中止しています。米国でも一九七九年に生産中止されました。

PCBは化学的に安定しており、また、薬剤や風化に強く、燃え難く、電気の絶縁性がよいなどの性質のために、産業界から一般の家庭内まで広く用いられていたものです。

また、このようなPCBの性質のために、かえってPCB汚染は広く地球全体におよび、汚染もなかなか解消しない状況です。つい最近の調査によっても、すでに生産中止してから二〇年以上になるのに、世界の海洋はPCBに汚染されたままです。とくに、地中海や北海の沿岸ば世界有数の高濃度汚染地域ですが、東京湾や大阪湾も例外ではありません。海水中のPCBはプランクトンに吸収され、それが小魚、大魚、イルカへとつながる食物連鎖によって濃縮します。イルカの皮下脂肪には海水中の一千万倍のPCBが蓄積されているそうです。

イルカなどでは、脂肪中に五〇ppm以上のPCBが蓄積すると、流産や不妊といった生殖異常とか、免疫力低下などの影響が出ることが実験で確かめられているそうです。

それにこんな問題点もあるのです。洗剤や他の有機塩素化合物とともに複合的に汚染しているところではPCBの体内への取り込みが増加したり、あるいは毒性が強まったりするそうです。また、PCBのあるところではカドニウムの蓄積量が増加します。このように、PCBには複合毒性のおそれがあると指摘されていることです。

エストロゲン類似物質によって、人間の健康に直接影響するような異常が生じているという証拠はまだ見られていません。ただ、これらの物質は食物連鎖を通して人体の脂質に濃縮されるおそれがあります。これがいつ暴れ出すか現在のところ全然分かりません。

ところで、これらの環境ホルモン様作用を有する合成化学物質が個々別々

にはなく、複数が一緒になって相加効果（効力（毒性）が各々の化学物質の効力の和に等しくなる）か、あるいは、相乗的に働いて効力（毒性）が数倍になることもあるということです。

現実の環境にはさまざまな環境ホルモンが複数存在するものです。とすれば、これらの中に相乗効果があるとすれば、個々の環境ホルモンの濃度が環境にある環境ホルモンの数分の一のレベルでもホルモン様作用をするおそれがあるということになります。ということは環境中の環境ホルモンの種類数が多ければ多いほど、生体に作用する個々の濃度レベルがさらに低くなるということです。

また、人体の「三大ネットワーク」である神経系、免疫系、内分泌系の科学的解明が進むにつれて、脳と免疫系、免疫系と内分泌系、内分泌系と脳の中に深い相互関係があることがわかってきております。環境ホルモンは単なる生殖毒性だけでなく、脳の発育や行動に影響を及ぼすことが明らかにされつつあります。環境ホルモンは人間の行動や知能、社会を組織する能力など、人類特有の資質を損ね、すでに変化させている可能性がある」と指摘されているのです。

実際、知能低下や生殖力の減退の兆候が現れるはるか前から、行動に変化が生じるのです。このような形で、人類が知らず知らずのうちにむしばまれていくのでしょうか。

合成化学物質にさらされた動物は攻撃的になるという報告がありますが、このようなホルモン様化学物質は、人類の社会行動や性行動に重大な影響を及ぼしている可能性があります。集団内の個体すべてが社会行動や性行動で変化すとなれば、社会構造にも変化が生じることでしょうし、なによりも困ることは、文明の基礎である人間の社会生活にはつきりした障害

が出るおそれがあるということです。

現在、現代文明が生み出した合成化学物質によって、現代文明そのものが内部から崩壊の危機にさらされているといえるのかもしれない。

要するに、環境に出た合成化学物質は多種多様な経路をとって生体に取り込まれるのですが、極少量でホルモンの合成や情報伝達を乱して、人体のホルモンシステムを攪乱することになるといえます。それにしたひとつの合成化学物質でも環境ホルモンとして複数のメカニズムをとって作用するし、また、複数の合成化学物質が複合して相乗効果を発揮することも明らかになっています。

ことに、極低レベルの濃度でホルモン様作用を及ぼすことが問題です。もちろん、胎児と成人とは毒性が異なります。成人になら影響を及ぼさない濃度でも、胎児に対してはあきらかに影響を及ぼす場合があるので、また暴露する時期によっても影響が異なるということです。

環境ホルモンはこれまでの環境汚染物質とは全然違うメカニズムで生体に影響を及ぼすということです。こんな不気味な予告があります。

「ホルモン・メッセージを攪乱する化学物質は、人類を人類たらしめている豊かな可能性を奪い去る力を持っている。滅亡よりはるかにたちの悪い運命が、人類を待ちかまえているかもしれないのである（『奪われし未来』 シーア・コルボーン他・長尾訳）」

いったい、わたしたちの未来にどんな運命が待ち構えているのでしょうか。環境ホルモンの恐ろしさを十分知り尽くした人たちの予告だけに不気味です。

とにかく、化学物質のホルモン様作用が明らかになって、環境汚染問題もかつてない新しい局面に立たされることになったといえましょう。何度

も言いますが、というのも、これまで問題がないと思い、ほとんど無視してきたごく低レベルの濃度の合成化学物質が人体に取り返しのつかない影響を及ぼすことがわかってきたからです。

とくに問題なことは、その数がおそらく何百、何千、いやもしかしたら何万に達するであろう環境ホルモンの大半が環境に漏れ出て、すでに地球環境が広く汚染されつくされているということです。これによって、わたしたちは、そして未来の人たちはいったいどのような影響を被ることになるのでしょうか。

もつとはつきり言いましう。

わたしたちはいま「環境ホルモンの大海」のただ中にいるのです。そしてわたしたちはただじつと身構えて、ひたすらわが身に起こる変化を見守るほかないということです。

環境ホルモンが人体にどのような影響を及ぼすかについてはまだよく分からないところもあるのも事実ですが、ただ幸いなことは、環境ホルモンを体内に摂取するルートが多種多様であるということです。ということは、適当なルートを選択することによって「環境ホルモンの大海」に漂っているわたしたちにも、まだ環境ホルモンをできるだけ体内に取り込まないようにする手立てが残されているということです。

それでは、現在、わたしたちにはいったいどのような選択の余地が残されているのでしょうか。

このことを考えられるまえに、わたしたちが置かれている現状はどうでしょうか。これをつぶさに見て、正しい現状認識がなければ、未来を正しく見通すことも、妥当な対策を講じるもできないからでしょう。

環境汚染対策の基本は汚染物質を排出しないことですが、現実使用さ

せている何万、何十万という数えられないほどの化学物質に対して、このような対策が果たしてどこまで実効を有するものでしょうか。またこれまでに環境に排出されてしまった数多くの有害化学物質をどのようにして回収排除すればいいのでしょうか。

これらの対策はまさに人類に課せられた「賽の河原の石積み」のような、効果のないエンドレスの泥沼のような対策となるにちがいありません。この泥沼の対策から抜け出し、人類の生き残りを図るには現状を百八十度変える根本的な対策を抜本的に実行する必要があるのではないのでしょうか。

これには一刻も早く、そのための行動を起こすことではないのでしょうか。どのような行動を起こすか迷っている時間はありません。

それにしても、わたしたちを待ち受けている「滅亡よりもつと悲惨な運命」とはどんなもののでしょうか。もしかしたら、その兆候がすでにわたしたちの身体にも現れているかもしれません。

29

「あれはぼくがやらせたようなものです」

木実子は目を大きくして、突然現われた森野の浅黒い顔をまじまじと見た。前よりもさらにどす黒くなつたような感じがする。

「耀くんを死なせたのはぼくです」

森野が話すあの夜の一部分始終を木実子は遠い過去の出来事のような思いで聞いた。彼女にはなんの感慨も沸かなかつた。

それよりも奇妙なことに、森野の話の耳にしたとき、なぜか、耀の姿が

脳裏に鮮明に浮いた。耀は生きているにちがいない、と木実子は思った。

「ぼくが未佐だったら、多分、あれと同じことをしたでしょう。あの晩、未佐に会わなかったら、ダイナマイトは自分で投げ込んだかもしれません。あれは学生時代に友人から預かったものでしたが、未佐から求められて探し出したものの、まだ使えるかどうか分からない代物だった……。そのままに続いた小爆発事件の詳しいことは知りませんが、ぼくのカンでは耀くんとよく遊んでいたお隣の中学生がなにか知っているような気がします。でももう取材はやめました」

森野はじつと木実子の顔を見た。森野の熱に浮かされたような目を見たとき、彼女はふとT新聞が今回の爆破事件を一番詳しく報じていたことを思い浮かべた。

「……なんとか現状を変えなければ、という問題意識でダイオキシン問題に取り組んできました。最初はなぜダイオキシンが対策もせずに放置されているのか不思議でなりませんでした。行政の怠慢を憤ったものです。業界との癒着を糾弾したものです。裏に隠された省庁相互間の馴れ合いや傷の舐め合いを暴いたこともありました」

「……………」

木実子は黙って頷きながら、彼女もまた闇雲に行政の怠慢を追求していた自分を思い出した。行政の怠慢の追求もエンドレスのものとは気付かず、あたかも大変なことをしているような錯覚に陥っていた。あれは自己満足に浸っていたに過ぎなかった。

「法人格を有する企業は登記された事業内容に限られた片寄った人格をもつに過ぎず、それ以上のことはなしえないものです。ダイオキシン汚染などの環境悪化行為は事業内容外の行為で、これを行えば、関連法規の有無

にかかわらず、それに対するペナルティと原状回復義務を当然課せられるはずで、それなのに行政は見てみぬ振りをして放置するか、ときには業界の肩を持ち、時間稼ぎやってお茶を濁す。あるいは一方的に、安全宣言をして問題をうやむやにしてしまう。行政が一番危険なことを知っていて、国と自治体はグルになって即座に安全宣言する。それはなぜか」

「……………」

「でもこのごろになって、その背後にもっと大きな問題があることによりやく気づかされたのです」

木実子は森野を見た。浅黒い額に汗が吹き出ている。

「現在、われわれが直面している状況は、極めて異常なものです。現代文明は、いずれ枯渇する化石燃料と人間が新たにつくりだした合成化学物質に全面的に依存しています。合成化学物質のうち、ダイオキシンやPCBなど、とくに問題のある塩素系合成化学物質とそれを含む生産物とで、世界のGNPの四五パーセントをも賄っているのです。これは利益追求のみを第一とする企業活動の結果です。このまま大量の合成化学物質を環境に放出していけば、人類の行く末はどうなるか。環境ホルモンの出現は人類を未知の領域へと連れ込んでしまいました。生殖への脅威は人類の存続を危険にさらすものです。T市のダイオキシン汚染は日本の将来というより、人類の未来を暗示する象徴といえるのじゃありませんか」

「そうね……………」

木実子はダイオキシンが数多くある環境ホルモンの一つに過ぎないことを思い出した。このことを知ったとき、彼女が追い求めている対策がエンドレスのものであることに気付くべきだった。そして闇雲に行動を起こし、未佐のいう根本的対策を実践すべきだったのだ。

「とにかく問題なことは、すでに何十年も前から市場に出回っている大量の合成化学物質のマイナス面について、われわれがなにも知らないということ。それらの安全性に対しては何らの保証もない状況でこれらを使わされているということ。」「……………」

「それなのに、われわれの税金で賄っているはずの行政の担当者たちはいったいなにをしているのか。現状も把握できないまま、なすべきこともなさず、業界と馴れ合い、業界の言いなりになって、企業の在庫整理に力を貸しているありさまだ」

「ああ……………」
木実子はふと現行の行政システムが急激に展開する現代文明に適合できずにいるのではないかと思った。そのことに気付かず、これまでいたずらに行政の怠慢を追求し、無い物ねだりをしていたのではないのか。

「現代人はいつのまにかすっかり合成化学物質漬けにさせられ、気付いたときには合成化学物質の湯舟から出るに出不来ない状態に堕ちていたというわけです。『毒を食らわば皿まで』というのでしょうか。それとも『毒を以て毒を制す』つもりだったのでしょうか」

森野はしばらく口を閉ざしていた。

「……………いまとなつては現状を回復する万全の処方箋や手ごころな解決策があるとは到底思えない。……………未佐くんはそれに気付いてああするほかなかつたんです。自分を追い詰めたものに対する唯一可能な反撃があれだった……………。いま、ぼくは自分のやってきたことの意味を考えているところです。でも未佐のあの行為のまえでは、これまで自分がやってきたことなんか、一瞬のうちに霧散してしまうことでしょう」

森野は頭を垂れたまま、自分を激しく責めるように呟いた。

30

木実子の目が光を放っているように見えた。彼女はもう一度未佐が言った根本的な対策のことを思い浮かべた。

森野は気を取り直すように、カッと目を剥いて話し出した。

「とにかく、事実を直視し、その意味するところのものを正確に把握することが必要なのだ。では今日の地球環境システムの状況はどうか。われわれはいま、ダイオキシンや環境ホルモンといった合成化学物質の大海を漂い、溺れてはじめているのです」

合成化学物質汚染の問題は非常に複雑である。これには、硫酸酸化物や窒素酸化物のように、工場の生産過程や処理過程などからいわば副生成物的出来るもののほかに、各種の原材料や製品、たとえば農業や化学肥料あるいは医薬品や食料添加物のように、積極的にもともと別の用途のために有用なものとして合成されたものが、加工や使用あるいは廃棄の過程で有害な作用をおよぼしているものがある。

人間活動に伴う合成化学物質による地球環境の汚染が目立つようになってきたのは、世界の産業が工業化を進めるようになってからだ。

現代の錬金術が目覚まし、工業技術も加工組み立てから合成化学へと展開するなかで、工業生産力を拡大し、大量生産大量消費大量廃棄方式の成長型経済システムが世界を覆い出すようになると、際立つて合成化学物質汚染が激しくなった。

地中深く収まっていた鉱物資源が掘り出されるようになって、人間に有害なさまざまな物質、たとえば、水銀や鉛などの重金属が地上に拡がり、重大な地球規模的汚染を引き起こしているが、これらの天然の有害物質に加えて、人間が自らへの危険も省みずに自ら積極的にせっせつと新たに人工の化学物質を合成してきたというわけだ。

「……これらの合成化学物質が環境に放出されると、最終的に人体に取り込まれ、体内に蓄積することになる」

大気に放出された合成化学物質は大気に広がり、やがてそのまま地上や河川、湖沼に落下するか、あるいは雨に洗われて川に流れ込み、海に集まる。このようにして合成化学物質がいたるところから海へ流れ込んでいく。

この過程で、これらの合成化学物質も地球環境の有する浄化作用によって分解されることもあるが、分解されにくいものはそのまま分解されずに環境一面に拡がっていく。そして極微量の合成化学物質でも生物生態系における食物連鎖をとおして急激に濃縮していく。

「……分解されるべきものが分解されずに、逆に、濃縮されて人体に取り込まれていくことになったのです」

植物性プランクトンが合成化学物質を栄養物と思つて取り込んだものの、それを分解して吸収できないまま蓄積することになると、これを餌にした動物性プランクトンにその合成化学物質がそのまま移り、蓄積する。それが小魚の餌となつていくというように、順次、小動物から大きな動物へと食い継がれていく食物連鎖の過程で合成化学物質が倍々ゲームのような勢いで何百万倍何千万倍にも濃縮していく。人間はこの食物連鎖の頂点にいるので、人間は食べるものを通して高いレベルに濃縮されている合成化学物質を摂取することになるのだ。

たとえば、非常に安定した物質で分解されにくいPCBは、先進諸国ですでに生産されなくなっているのに、いまでも世界の海洋に極めて薄く拡がっている。このエストロゲン類似物質はプランクトンをとおして小魚に濃縮され、小魚を餌にしている海鳥にはもちろん、動物性プランクトンや小魚を大量に食べる鯨やイルカ、アザラシにも、すでにかんりのPCBが蓄積している。そしてさまざまな影響がはじまっている。

「……地球環境のひとつのシステムである生物生態系には本来いろいろな有機物を分解して消費してしまう働きを備えているのですが、分解されにくい有機物（合成化学物質の多くがこれに当てはまる）は逆に濃縮してしまふのです。とすれば、分解されにくい合成化学物質は環境に放出すべきでないのです。生物生態系における濃縮という機能は環境に放出される超微量な有害物質による環境汚染をチェックする役目を担っていると言うこともできるでしょう」

このように、世界のいたるところで使用されている多くの分解されにくい合成化学物質が地球規模で濃縮され、環境を汚染している。ということは、地球環境のもつ有限の容量を超えて合成化学物質を使用しているということを意味する。それにもかかわらず、人間はこれを放置しているのだ。このことは人間自ら故意に自分の生存環境を悪くしていることを意味しているにもかかわらず、これをコントロールしようとしないうか、コントロールできずにいるということである。それはなぜか。

「現行システムが合成化学物質汚染に対してお手上げの状態にあるということではないですか」

「ということは、この状況から抜け出すには、現行システムを変えるか、それとも合成化学物質をこれ以上使用しないか、どちらかということですか」

か」

「そういうことになりますね。でも現行システムのもとで合成化学物質汚染が進んでいることを考えると、現行システムを前提として合成化学物質をこれ以上使用しないという選択はできないことでしょう。なにも合成化学物質にかぎりませんがね。放射性物質なども同様であることはいうまでもありません」

「とにかく、いまのままではダイオキシンや環境ホルモンなどはどうしようもないということ……」

「まず、認識すべき点は、わたしたちが享受している現代文明はいまやマイナス（汚染）がマイナス（汚染）を呼ぶマイナス増殖段階に入っているということなんです。現行の政治システムや行政システムはこの状況に対応できずにいるんです。健全な人間社会を取り戻し、人類の生き残りをはかるには、このマイナスの増殖を制御し、マイナスの発生を食い止めなければなりません。これにはまず、現代の大量生産大量消費大量廃棄システムを見直すことです。なにしろ、これが現代の環境問題拡大の元凶なのだから……」

「やはり、現行の政治システムや行政システムは陳腐化してしまっているのね。これではいくら政治の無策や行政の怠慢を責めても問題を解決することにはならないのね」

木実子は役所の陳情したり、官僚相手に言い合ったりしたことを空しく思い出した。結局、自己満足のなかで相手を傷つけていただけなのか。徒労に帰したという思いが彼女を一層空しくした。

「すでに現行の政治システムや行政システムでは手に負えない状況が出現しているのです。事実が先行して、それをコントロールする制度が遅れを

取っていると断言していいでしょう。それなのに、これまでこのことについて目をつむってきた。あえて、時代遅れとなった政治システムや行政システムのもとで問題解決を試みようとしてきた。それはなぜか」

木実子は自分に言い聞かせるように話す森野をじっと見た。

「それは事実を直視しようとしなかったからだ。現代文明がすでにマイナス増殖段階に入っているという事実を直視しようとしなかったからだ。そしてなにごとくも互いに他人任せにし、『みんなで渡れば恐くない』とタカを括っていたのだ」

「その通りよ。残された道は、現行システムを百八十度転換するほかないのだけ」

木実子は現代科学技術の偏った発展が気になった。生命科学や遺伝子工学、情報科学や電子工学を基礎とするハイテク産業の止まるところを知らない展開は一体どこを目指しているのだろうか。なにかが間違っている、と認めて仕方がない。

「人類が生き残りたければの話ですね。でも現代文明にどっぷりつかっている現代人にとって、これは非常に難しい選択かも……。なにしろ、現代文明の問題点を是正し、これに代えて新しい文明をつくることになることだから。これには現状を一八〇度転換するパラダイム・シフトが欠かせない」

文明の歴史のなかで、人類はどこでどんな間違いを犯したのか。

人類が生きていくためには、まず食糧を確保し、つぎに、安全に生活できる居住空間を獲得しなければならなかった。そこで、人類はまず、農業革命を通して十分な食糧をうることにした。つづいて、都市革命を通して、都市という安全な居住空間を造り出し、快適で活気に満ちた都市文明を造

り上げた。

農業革命は約一万年前に始まった。都市革命が始まる約六千年から五千年前ころまでは、人類対地球(自然)の関係はまだ比較的協調的で、人類による地球(自然)侵害も小規模で表面的なものだった。

これが一転して、両者の関係に大変化を生じさせたのが、都市革命以降といつていい。都市は自然の一角を自然から切り離し隔離して人類の居住地域を造ったのだから。それでも小規模のうちにはさほどの影響もなかったが、大規模の都市に発展すると、周りの自然への影響は目に見えて大きくなった。

ところが、これらの関係をさらに質的に変える大変換が訪れたのは、いまから約三百年前のことである。それは現代文明の基になった近代西洋文明に基本原理を提供した近代科学の登場である。これは限りある地球(自然)を無限なものと考え、このことを前提に、主体(自分(人間))と客体(地球(自然))の二元論を基礎として、地球(自然)の征服を是認するものだ。

近代西洋文明はこのような原理を基礎とする近代科学を基盤とし、近代合理主義を推進力として、当時の世界の先端を行く西欧を発祥の地として生まれた。イギリスの産業革命を皮切りに、西欧諸国や米国で産業革命をつぎつぎと遂行して産業の工業化を進めるとも、科学技術の展開によって一層の発展を遂げていった。

とにかく、現代文明の最大の問題点は、無限性を前提とし、プラス面のみを見て、その追求に奔走し、マイナス面に十分目を向けようとしなかったことだ。このため、現代科学技術文明はプラス面を急速に拡大させる一方で、実は、それ以上の勢いで、多くの矛盾を孕み、マイナス面を異常増殖させることになった。

ことに、最近の無限成長を指向する物資の大量生産大量消費方式は世界経済を大いに成長させたものの、エネルギーや資源の大量消費によってエネルギー・資源の浪費や枯渇を加速させる一方で、有害なガスや廃液をところ構わずばらまき、夥しい数の有害化学合成物質と大量の廃棄物を生み出した。そして自然を破壊し、環境を著しく悪化し、大気を汚染し、水を汚し、都市をゴミで埋めてしまい、都市近郊のいたるところにゴミの山を築くことになった。

「……このようなことになった根本原因は、野放図な人間活動を無限に増長させたからです。人間活動の場である地球環境システムはもともと有限なものであるにもかかわらず、無限性を前提として地球(自然)の征服を是認する近代科学を基礎にした結果です。ですから、近代科学に代表される無限性を前提とするパラダイムを有限性を前提とするものに変えていかなければならないのです」

地球(自然)の征服は、地球(自然)をとらえるときに主体(自分)と客体(地球(自然))とに二分する考えを基礎にしたことで一層増長する。主体と客体とに二分すれば、地球(自然)を自分(人間)と関係なく、分断してとらえることになるので、征服される地球(自然)の痛みを人間側は全然感じることがない。そのため人間は地球(自然)を自由気儘に利用しても自分にはなんらのマイナスの影響が及ばないと考えることになる。

それゆえに、地球(自然)をいくら気儘に利用することがあっても、その結果生じる地球(自然)の悪化については無関心か、関心をもつことがあっても極めて低いことになる。

いや、もともと無限性を前提とする以上、地球(自然)の悪化というマイナスをチェックする機能がないのは当然であった。また自分の都合に合った

プラスのみをを追及するから、科学技術が跛行的に展開するもの当然なことである。

結局、もともと現代文明には適度に人間活動を抑えるという機能が欠けているというよりも、無限性を前提とする以上、現代文明にはそのような機能がもともと不要だったのである。その結果、このような行動を助長し、無限に続く環境悪化という、いまでは信じられないような結果を招いていることは当然過ぎる当然な帰結にすぎないのだ。

31

「あの子はぼくの子だったのかね」

二度目に訪ねてきたとき、土田が木実子の顔も見ずに他人事のように言った。

「……………」

この一言がなければ、木実子はふらふらと土田の胸にふたたび安らぎを求めていたかもしれない。だがソファの背にもたれ、横柄に股を広げている土田を一瞥したとき、彼女は二度と彼に目を向けようとしなかった。

木実子は耀の短かった人生を思い、どのように総括すべきか、考え倦んでいた。耀がだれの子であろうともうどうでもよかった。というより、そのことはいまの彼女にとって問題ではなかった。

「きみ、どうなんだね」

「……………あなたには関係のないことです。耀はもうだれにも属しておりません。耀は遠いところに行ってしまったのですから」

木実子にはもうこの世にいない耀をつかまえ、誰の子だったと重ねて聞く土田の神経を疑った。

彼は持ってきた新聞の一面をテーブルのうえに広げると、むっとした表情で下段を指した。

木実子の目に、横組みの大きな活字の大見出しが飛び込んだ。

「S県の川で高濃度」

これを挟んで、上下に「ダイオキシン、K庁調査」と「大気や土壌・ハトからも検出」という幾分小さな活字の小見出しが並んである。

彼女は記事に目を移していく。

……………この春、産廃焼却場が密集し、住民紛争が起きているS県のT市などで大気、水質、土壌、植物などを一斉調査した。河川水は、S市のA川から一リットル当たり十九ピコグラム………また土壌は、S市とT市でグラム当たり百四十ピコグラム………県内で比較的汚染が少ないとして選んだC市の濃度と比べて、十四倍………かなりの高濃度であることがわかった………（一九九八年十月二十四日付け朝日新聞朝刊）

「M教授のデータとは大分違うが、きみたちがいろいろやつても、なにも変わらないようだね。耀くんがあんなことをしてもなにも変わらないだろう」

土田はこれ見よがしに言うと、木実子に冷やかな目を向けた。

「この汚染では、ドイツなら農地としての利用制限はおろか、子どもの遊び場なら浄化対策をおこなわなければならないほどの高濃度汚染よ。これを平気で放置しておくことになんの疑問も憤りも感じない人だったのね、あなたは……………」

木実子には反発する気も起こらず、口のなかで呟くだけだった。

「じゃ」といって、土田は立ち上がった。彼の目には未練がましい纏まり付くような強い視線はなかった。

耀の病気の原因を探りだそうとダイオキシンを疑い、母のグリーンジュースのせいだと思い、母を恨み、対策をせずにダイオキシンの汚染を無造作に放置していた行政の責任を追求してきた。だがいまではすべてが空しいものだった。

「いったい、今日までなにをしてきたのだろうか」

挫折感を意識的に疲労感と取り換え、解消することのない疲労が萎えることをのぞみ、来る日もくる日もいたずらに訳もなく彷徨していたに過ぎなかったのではないか。毎日ただひたすら、自己満足を求めてあてもない自分だけのひとり旅をつづけていたのではなかったのか、と思った。

突然、木実子のこころのかなで、森野が言ったことが狂ったように響いた。

「……未佐はああするほかなかった」

ふと木実子は、耀もああするほかなかったのかもしれない、と思った。

そのとき突然、木実子の脳裏から、ひとつのダイオキシンの無数の環境ホルモンへと拡大していく犯人探しのなかであてもなく迷い続けている自分の姿が消えた。そして新たなターゲットを指して突き進んでいく自分の鮮明な新しい像が浮かび上がった。

32

「パラダイムをシフトして、いまのシステムを変えることね。でもどうす

ればそれが可能かしら……」

森野は熱に浮かされたような目で木実子をしばらくじっと見つめた。それからおもむろに口を開く。

「現代文明の問題点を取り除き、単に改善するだけでは足りない。さらに積極的に、旧来のパラダイムに代えて、人類というよりも人類を含む地球上のすべての生命全体の生存基盤である地球環境システムに適合する新パラダイムのもとで、新しいシステムをつくり出さなければなりません」

新しいパラダイムの基本としては、地球の有限性を前提とすること、一元論的地球(自然観)に基づき、個々のではなく全体的把握に徹し、これまでのプラス最大化に代えてマイナス最小化を行動原理とすることだという。

第一は、現代文明における無限性の前提を有限性に転換することが不可欠だ。

現代文明の根本的な問題は、現代文明の受け皿である地球環境システムがもともと有限なものであることを無視して、無限を前提に征服のかぎりをつくし、発展をめざして限らないアウトプット(技術的物質的所産を生み出してきたことだ。その結果、プラスが増えたものの、それにともないマイナスも増大することになった。さらに問題なことは、プラスが有限の壁に阻まれ、マイナスへ転化し出していることだ。そしていまでは世界中がリスクに満ちあふれた社会になってしまっているのだ。

このために、新しいパラダイムでは、現代文明が前提とする「無限性」を「有限性」に置き換え、有限な地球環境システムに合わせたものとするほかない。

第二に、これまでの二元論的地球(自然観)を一元論的地球(自然観)に変え、地球の有限性のもとで、人間と環境の関係を見直すことだ。

これまでは地球(自然)と人間を別々に分けて考え、また地球(自然)を小さく細分化してとらえてきた。しかし環境はそして地球(自然)は切れ目無くつながって、ひとつの全体を形成しているものである。そのなかに、人間も織り込まれているのだ。

比喩的にいえば、地球(自然)の時間と空間という縦系横系の織りなす織物に進化の歴史をプリントした人類の遺伝子が離れがたく織り込まれているということである。このことを基礎として、新しいシステムではものごとの全体的把握につとめ、人間活動の自動コントロール機構を取り入れることが重要である。

そして第三は、行動原理を従来のプラス最大化からマイナス最小化へ転換することだ。

マイナス最小化行動原理においては、プラスを追求するまえに、まず、それからもたらされるであろうマイナスを最小にすることを考え、プラスの追求はマイナスを最小にする範囲内で行うのだ。

地球環境システムにおける人間の営みは、本来的に、全体性と階層性が支配している有限な時間空間である地球環境システムでしか許されず、人間活動は地球環境システムのもつ容量の許容範囲でしか行うことができなものである。にもかかわらず、人類はこれを無視して、地球環境システムの限界を超えた営みを続け、巨大化高度化大量化した結果、人間活動によるアウトプットが地球環境システムのもつ容量を超えはじめている。

このため、現在、地球環境システムにおいては、時間的空間的狭小化傾向が幾何級数的に進み、それに応じて、時間的空間的過密化傾向が進んでいる。これにともない、全体が複合化する傾向にあり、また、単純化単一化する傾向にある。そのため、地球環境システムは極めて脆弱化してきてい

るので。

このような状況のもとでは、マイナスが増え続けることは危険なうえ、プラスのマイナスへの転化が常態化するようになる。その結果、人間社会システムのリスクはますます巨大化高度化大量化への一途をたどることになる。そしてシステム全体を崩壊させる破局を迎えることになりかねない。これ以上マイナスを増やすようなことは許されないのだ。

現代人はこれまで、次世代のことも考えずに、まるで地球(自然)を植民地として搾取のかぎりを尽くし、派生するマイナスを無視して、現世中心の物的豊かさを追求してきた。いいかえれば、物的豊かさといういわばプラス面のみに着目して、これを最大化しようとしてきたわけだ。これにともない累積したマイナスがリスクに満ちた人間社会を生み出し、今日の地球環境問題の噴出を招いたのだ。日本におけるダイオキシン問題もそのひとつにすぎない。

それゆえ、このようなプラス最大化原理に代えて、マイナス最小化原理を基本とし、人間活動においては、プラス追求に先立ち、まずこれにとみなうマイナスを全体的に最小化することを考えなければならない。

「マイナス最小化行動原理ですか。ダイオキシンや環境ホルモンなどはマイナスなのですね。ダイオキシンをやっつけばいいのですね」
木実子が声を高める。

「まあ、そうですが、その背後にも目を向けるべきでしょう。ダイオキシンだけをやっつけばすむという問題ではないですからね。たとえば、ダイオキシンなどの環境ホルモン(内分泌攪乱化学物質)が生み出される仕組みや、対策もなされず放置されてきたからくりやそれを助長するわけなど、問題を全体的に取り上げなければこの問題を根絶することはできない

でしょうね。難しいことですが……」

現代文明の推進力となっている科学は、ヨーロッパにおいて中世の神秘主義や封建的慣習を打破すべく新しく登場してきた近代科学が基礎となっているが、近代科学は地球環境システムが有限であることを全く度外視して、逆に、無限という前提で自然の征服を是認した。

近代科学はまた物質万能の近代合理主義に基づくものであった。そして物質万能の近代合理主義の思想を背景に、資本主義経済は経済的効率性を基準に、無限の成長を目指す。こうして自然征服主義と無限成長主義を掲げ、人類は新たな世紀へ突入する。

第二次世界戦争後、科学技術と経済が合体して、科学技術の産業化がますます進み、現代文明の急速な巨大化高度化大量化がはじまった。

物質万能の果てに、今日の大量生産大量消費大量廃棄の物質文明(現代文明)が出現し、地球(自然)そのものを植民地として食いものにしてきたのだ。

地球(自然)を食いものにするということは、とりもなおさず、地球(自然)を駄目にする事で、これは地球(自然)を生存の基盤としている人類を駄目にすることを意味する。いいかえると、現代人は地球(自然)を食いものにして、自分の手足を食い千切ってきたということだ。

物だけを信じ、物質的な享楽に耽っていたつもりが、自分で自分を食いものしていたに過ぎず、その結果、地球環境問題という大きなツケだけが残されたというわけである。

「……われわれはふたたび人間を取り戻さなければならぬ……」
森野はじつと木実子を見た。

33

「新パラダイムは分かったわ。いまの内容とまるつきり反対のようだけど、旧パラダイムから新パラダイムへ簡単にシフトできるものかしら」

木実子は論点を巧みに外してのらりくらりと対応していた行政担当者を思い浮かべた。

「時間がないから人間のこころを失ったような行動を続けるものには実力行使以外ないかも……、でもほかの手段も考えて、最善をつくすことだ」

木実子は森野の言ったことを反芻した。何度も反芻を繰り返すうちに、おぼろげながら森野が言わんとすることが脳裏に映像となって浮かんできた。

木実子が敵と決め、ひとつの敵を追い詰め、攻撃を仕掛けても、敵はつぎからつぎに現われた。無数の敵に気づいたとき、彼女は森野の言っていることがようやく具体的ななたちとなつて理解できたのだ。彼女は早速、人間が地球環境を守るといふ共通の意識のもとに連帯して現代文明を終息させ、これに代わる新しいシステム(新しい文明)を作ろうと世界中に呼びかけた。

木実子はこれまで自ら行動しようとせず、現代文明のぬるま湯のなかに浸り、ただ他のものに対する責任追求に明け暮れていた自分を恥じた。耀は幼い頭で自分がなをなすべきかを考え、直截にそれを行動に移したのだ。彼女はかわが子に間違いを指摘され、新しい生き方を教えられたような気がした。

しかしダイオキシンの環境ホルモン潰けのなつて存続の条件さえ奪われつつある人類に、果たして新しいシステムをつくる時間的余裕が残さ

れているのだろうか。

行政担当者は組織や自己の利益を第一義に考えるだけで、思い切った対策はなにひとつ実行しようとしなない。企業は言い訳に始終し、自分勝手な行動しかしない。組織に属するものは誰もがひとりの人間として考えようとしなない。一人ひとりの人間が集まって社会をつくっているのに、組織はまるで支配者のようにわが物顔に振る舞い、人を踊らせ、食い散らかし、蔑ろにし、隷属化している。

いまこそ一人ひとりが人間であることを自覚し、未来の人類の代理人として行動を起こし、勝手気侷に振る舞い、環境を汚染し、人類の未来を奪おうとしているものをひとつひとつ葬り去らなければならないのだ。

だがこれは一朝一夕にできることではなかった。ひとつひとつできることから始めるほかない。耀や未佐が考えを即実行に移したように、これらの元凶を片っ端から爆破していくほかないのではないか。そしてこのための行動を、明日といわず、今日から起こさなければ、と木実子はここに決めた。

34

ダイオキシンの環境ホルモンの作用を考慮して、一九九八年にWHOは耐容一日摂取量(TDI)を「体重一キロ当たり一〇ピコ(一兆分の一)グラム」から「一〜四ピコグラム」へと厳しく見直した。これを受け、関係省庁でも見直しを進められているという。

同じころ、テレビのニュース番組で「T市の野菜はダイオキシン濃度が

高い」と報道された(一九九九年二月一日夜)。これがきっかけとなって、大手スーパーや小売店など約三百を超える店による関係地産の野菜の販売中止が相次ぎ、関係地産野菜の価格が半値以下に暴落する事件が起きた。

野菜の販売中止騒ぎを契機に、これまで「大騒ぎになれば責任をとれない」と公表を控えていたJAT市が同年二月九日、二年前の一九九七年に行なったダイオキシン調査の結果を公表。ホウレンソウ一グラム当たり平均濃度は〇・二七ピコグラムで、K省の全国調査よりやや高い程度。これを受けて、各関係省庁は同日、「直ちに健康に影響が生じるとは考えられない」などの見解を一斉に出した。JAT市はすぐさま安全だと訴える。

S県もテレビで対象となった地産のお茶について「(テレビの)報告通りの濃度だとしても、ダイオキシンはお湯にとけにくいので、安全性に問題はなない」と言い、K省も「通常のお茶の摂取では健康影響はない」との見解を矢継ぎ早に表明した。

このケースでも、まだダイオキシンについては新TDIが決まっていないうというのに、行政は早々に「安全宣言」するという従来の手法を踏襲した。

一九九九年三月二六日、R省は超高濃度ダイオキシン汚染で閉鎖したN町のごみ焼却施設「H美化センター」で働いていた労働者の血液中から、脂肪一グラム中最高八〇五ピコグラムのダイオキシンを検出したと発表した。血中濃度としてはこれまでの国内調査の最大値であり、これは一般人平均の約四十倍にあたるという。

微量のダイオキシンによる影響として、免疫系、生殖系、脳神経系の障害が指摘されているが、その場合、百ピコグラム以上が要注意レベルといわれている。

日本ではダイオキシン対策が他の先進諸国に比べ、一〇年は遅れていると指摘されているのに、なぜか行政も政治も根本的対策を取れずにいる。T市での騒ぎのあと、鳴り物入りでまとめた政府のダイオキシン対策推進基本指針案もこれまで各省庁が取り組んできた内容を土台とする寄せ集めで、ダイオキシン排出規制の強化や食品ごとの基準の設定といった具体案を欠き、現状以上にダイオキシンを削減できるかその効果は不明だった。

また企業にも新しく生まれ変わろうとする積極的な動きが見られない。そんななか、公正取引委員会は一九九九年四月二十八日、首都圏の自治体が発注するダイオキシン類の測定分析業務で談合を繰り返していたとして、合計十一の測定分析の会社や財団法人に対し、独占禁止法違反(不当な取引制限)で排除勧告をした。前年六月に実施された立ち入り検査後、測定分析業務の落札価格が以前に比べ、最大七割以上も下落したという。

一九九九年七月十二日になってようやく、世論に後押しされるかたちでダイオキシン対策の基本法ともいうべき「ダイオキシン類対策特別措置法(ダイオキシン対策法)」が成立した。K庁の幹部が「時の運もあつたが……、議員立法でなければ、他省庁の抵抗で成立は到底不可能だった」といつているらしいが、肝心の自身は各政党間の駆け引きや関係各省庁の抵抗で無残にも切り裂かれ、官僚や業界好みに薄められてしまった。

このダイオキシン類対策特別措置法案に対して、当初与党内には産業界や関係省庁の思惑を背景に消極的な声が少なくなかった。だが、テレビ報道から広がったT地産野菜のダイオキシン汚染騒動によつて、消極派も態度を軟化せざるをえず、法案は衆議院本会議でまがりなりにも全会一致で可決された。

この議員提案の法案に対しては、また関係各省庁も所管事項と省益侵害

に対する危機感から、最後まで手を代え品を替えて議員や政治家に働き掛けた。K省は所管の廃棄物処理法で十分対応できるとして消極的態度に終始した。法案にある小型焼却炉の規制は自治体の負担が大変などと主張した。T省は産業界の意を受けて総量規制に反対した。N省は食品ごとの規制値を決めると消費者がパニックを起すと脅した。これには各省もN省に同調したこともあつて、結局、ダイオキシン汚染食品の規制が法案から削られた。もちろん、ダイオキシンを発生させる塩素系の樹脂や農薬などに対する規制もない。

個々の食品規制の代わりか、人が一生とりつづけても健康に影響のない「耐容一日摂取量(TDI)」が体重一キログラム当たり四ピコグラム(ピコは一兆分の一)と、これまでより若干厳しくなった。といつても、この数値はまだ、国際的に見てかなり高いものだ。それにダイオキシンや環境ホルモンは母体から胎盤を通して胎児へと移行する。日本の新生児は生まれるときにはすでにダイオキシンや環境ホルモンに汚染されているのだ。もしかししたら、何代かこれを繰り返すうちに、日本の新生児は生まれたときにTDIを超えてしまつていくということさえありうるということである。

K省のダイオキシン調査によると、一九九八年度の体重一キログラム当りの一日平均摂取量は二ピコグラムという。そして日本に住む人のダイオキシン類の摂取経路は、九〇パーセント以上が食品からである。そのなかでも大きいのが魚介類からのもので、六〇から七〇パーセントに達する。これに肉・卵、牛乳・乳製品、有色野菜、穀物・芋、野菜、米と続く。

このことを見ても、たとえ国際的に見て高いTDIの値でも、これをクリアーするために欠かせない最良の対策は、とにかくダイオキシン類高濃度汚染食品を個々の規制して、これらの摂取を禁止することだろう。だ

が日本国の舵取りを自ら任じる官僚たちは、謀議のすえに、日本に住む人びとにとってダイオキシン類の摂取量を減らすための唯一確実な対策を葬り去ったのだった。

また、ダイオキシン発生の原因となる塩素系の樹脂や農薬といった工業製品の直接的規制がないがしろにされた。これではごみ処理や燃焼によるダイオキシン排出規制をいくら厳しくしたところで限りがある。

とにかく、政治家にも、官僚にも、そして企業にも、ダイオキシン対策に真剣に取り組もうとする姿勢はなかった。

35

「これじゃ、なんにも変わらないじゃないの」

「ごみだけが問題じゃないのになあ……」

「TDIの値も中途半端だし……、それに母体から胎児へと移行する分をどう考えているのかしら。あのTDIはこのことを全く無視しているわよ。」

それにダイオキシンを発生させる塩素系樹脂や塩素を含む農薬などの規制といった発生源対策がない」

木実子は受話器に向かって怒鳴るように激しく言った。

ダイオキシン汚染は環境ホルモン汚染全体を象徴するものだ。ダイオキシン汚染大国日本はまた環境ホルモン汚染大国でもある。ダイオキシン対策がおざなりなものとなつたいま、この国の環境ホルモン対策も先が見えてしまった。

ダイオキシン汚染大国日本、環境ホルモン汚染大国日本には一体どのよ

うな未来が残されているのだろうか。相変わらずダイオキシン汚染や環境ホルモン汚染の人体実験が続くこの国の未来の人びとにどんな世界が出現することだろうか。

「ああ、あのふたりの死は一体なんだったの」

「こんな程度なんだ、日本の政治家や官僚の程度は。期待するほうがバカだ。もちろん、この法律を執行する行政にもなにも期待することはできない。地球はひとりひとりが自分で守るほかないんだ。地球環境を汚染するやつらには戦いを挑み、自ら正義の実現を計るほかないんだ。ふたりを犬死にさせてはならない」

「『新しい酒を古い革袋に入れる』ようなことではエンドレスの闘いになるわね。『古い革袋』そのものを新しいものに代えるようにしなければならぬわ」

「そうだ。だが不正や不当な行爲を見逃しておいて『新しい革袋』を用意することは至難なことだ。『新しい革袋』を用意するまえに、不正や不当なことを行なうことも徹底的に取り除くことが必要だ」

「そうね。片っ端からよからぬことをする輩を退治しなくちゃ」

規制強化でゴミ処理施設の新設が進まず、不法投棄・野焼きが急増している。なかには外国に送り出すものまで現れた。

二〇〇〇年に入って、K省が廃棄物の野焼き禁止の方針を打ち出した。

K庁も続く。だが相変わらず、全国各地で不法投棄や野焼きの煙が絶えることなく、住民を悩まし続けている。

T市から木実子の姿が消え、古い家では母貴世が以前の生活に戻っていた。前後して、木実子の後を追うように、森野の行方が分からなくなった。

(序の巻 完)

参考・引用文献

- ・ シーア・コルボーン他（長尾力訳）『奪われし未来』一九九七年 翔泳社
- ・ デボラ・キャドバリー（古草秀子訳）『メス化する自然』一九九八年 集英社
- ・ 「止めよう！ダイオキシンの汚染」さいたま実行委員会「編」『「ゴミ焼却」が赤ちゃんを殺すとき』一九九八年 合同出版
- ・ 天野博正『環境科学―人間環境の創造のために』一九八二年 技報堂出版
- ・ 同『人類は滅亡への道を歩みはじめた』一九九四年 ミオシン出版

天翔け地這う 序の巻 超人誕生

生野以久男

二〇一一年六月三〇日第一版発行

(c) Ikuno Ikuno 2011

発行所 kinokopress.com

代表 森岡正博

所在地 大阪府堺市学園町一―一 大阪府立大学人間社会学部

倫理学研究室内

連絡先 www.kinokopress.com内の連絡先に問い合わせ

本文レイアウト+デザイン 森岡正博

本書およびPDFファイルの無断複写は、著作権法上の例外を除き、禁
じられています。

ISBN なし